詞瓊綸緣接

078363-000-7

815.7-M893Yk

詞の玉の緒縁接

八木立禮／著

M42

DAC-2017

大島仲太郎
宮内猪之熊
正宗敦夫　編輯校訂

著者　八木立禮

詞瓊綸緣接

歌文珍書保存會

詞瓊綸緣接序

さきく。辭の玉の緒につきて。著せる書どもは。まづ。若狭人の。玉の緒くりわけ。妙玄寺義門が。著述なり。かの書は。玉の緒のうちにて。證歌など。引たがへられたる。または。格のまぎれたるなどを。正せるにて。過半は取らるべきものなり 伊豆人の。賤のをだ巻。因幡人の。末わけ櫛。備前人の係辭辨。などあれど。かの。繰分を除ては。皆無學者輩の所爲にしあれば。自身その玉の緒の。玉の光を炬とし。その緒にすがりて。語の道のかたはし。いさゝかばかり。辛うじてたどり初たりながら。數々の玉の中にて。少しづゝの瑕を見いで。または。ふと歌の格を。たて混はされたるなどを。摭擧て。ことごとしくいひたて。その緒の末を左右に。くりかへし諭せる物にて。其おのれ〳〵がちからにて。他の書より引出來たるは。微塵ばかりもなく。謬のみなん多かれば。更に論らふにも。足ずなん有ける。いでや。いと。をこなる。いひざまにはあれど。予が。この緣接はしも。玉の緒は。玉の緒にて。さておき。かの書に。いまだ考へ及ばされざる處。または。引きもらされたる歌の格などを。あげて。玉の緒の短きを。よりつぎ。長く世に傳へ

国立国会図書館
国立国会図書館
26. 9. 10
245394

ん。とてのしわざにて。かの繰分以下の著述者などの。いまだ夢にも知ざる處になんあれば。看官(レンヒト)。上にあげたる。三部の書と齊しなみに。なおもひよそへそ

嘉永四年十二月

八木立禮しるす

詞の玉の緒繰接の緒言(ユエヨシ)

此書の名よ、繰接としもつけける故は、詞の玉の緒、及、環綸餘縷等に(ノチノコリノイト)餘縷は、玉の緒とは甚じく劣りたる書にて、てにをはのうへにはかつて關らぬ事などをあげ、あるは、その一格と、たて〻引れたる歌どもを、いひもてもけば、みな、玉の緒にあげられたると、同格なるなどありて、いとみだりなる、書なる故にや、玉の緒の卷末に、その書名は、あげられたれど、後鈴屋翁の、心しらひにて刻本にはせられざるなり、引もらされたる歌の格、または、かの二書に、例はあげられたれど、其用格の、趣意をば、説明(トキ)されざる、などを、引補ひ、解あかさんとてなん、

○かの書は、歌の格をのみ旨と擧て、その格の、所以(シカルユエ)然をば、かつて解れざれば、讀者(トルヒト)、その格を、とりたがへ、用ひ謬ること多かり、故に、予は、その格の然る故はさら也、用ふ趣意を、旨と解諭せるに、なんあれば、讀ん人、忽に、思ふことなかれ、

八木立禮識

詞の玉の緒よりつぎ目錄

二五の句、全き同語を以て、文なせる格、一
日夜などいふ語を、上下に二ッ置て、『無し』『無き』など結ぶ格、二
四の句にて切り、五の句にて、また切りて、いひすつる格、三
五の句第三もじに、畢のぬを置て切り、第七もじに、『は』もじを置て、上にうちかへす格、五
『なしに』の辨 六
『ずがは』の辨 七
『ずに』の辨 九
『ながら』の用格並解 十
『見ゆ』の用格並解 十一
『ばかり』の用格並解 十三
『おもひきや』の用格並解 十六
『ぞありける』の用格並解 十八
『にこそありけれ』の用格並解 十九
『なりけり』の用格並解 廿一
『まし物を』『ましを』の用格並解 廿二
上に切レたる所ある歌は、下の句に、『ぞ』をおくべからざる事 廿三
上に切レたる所あれど、下に、『ぞ』と置ても叶へる格 廿四
『けり』と置て、『げん』にて結ぶ格、並『らん』と置誤る辨 廿五
上に『けり』と置て、下に『らん』と置く格 廿六
上に『らん』と置て、下を半過去の辭にて結ぶ格 廿七

『て』『を』『かな』の三ッ辭を置て、調をなせる格 廿九

以上 上之卷

意を含めて、『て』といひ居る格 卅三
意を含めて、『てか』といひ居る格 卅四
意を含めて、『に』といひ居る格 卅四
意を含めて、『にか』といひ居る格 卅五
意を含めて『へ』にて切る格 卅五
意を含めて、『ば』にて切ル格 卅六
意を含めて、かゝり辭の『ぞ』にて、とぢむる格 卅六
呼かくる『いかに』の例 卅七
『ばいかに』の例 卅七
『いかにせん』『いかがせん』の辨別 卅八
『いかにぞや』の例 三十九
『めるかな』の例 四十
『らん』にて切て、『かな』にていひすつる格 四十
與の意の『と』をむかへ合せ置て、『なりけり』と結ぶ格 四十一
不の辭を、一つ置て、二所に、きかする格並解 四十二
『らし』と置べき所を、『らん』と謬る事の辨 四十四
『らん』と『らし』と重る格 四十六
『見わたせば』などの、下に、『かな』は置ぬ辨 四十六
『けるか』の例並解 五十
『けりやは』の例並解 五十一

『てふなり』『てふらん』の例　五十一
以上 中之巻
『し』を助辭なりといふは非なる事　五十二
『名にしおふ』と用ふは誤なる事　五十四
『緣』を『えにし』と訓は誤なる事　五十五
『ワ』と云ふ俗語に當れる『なり』の用格　五十六
『ふれる雨』とはよむべからざる事　五十八
以上 中之巻附錄
『まし』より、躰言に續る格並解　六十
四段の活語、第四の音に、『よ』もじを添て、令語につかへる例　六十一
『來』は『こ』にて令語になる事　六十二
『來』字を『きたる』とのみ訓て、『くる』といふべき處をも、『きたる』といふ非なる辨　六十三
『たてれをれども』の例並辨　六十八
五句の下に、『は』『も』等の辭を加て、上にかへしみる格　七十
四の句にて、『かな』といひすつる格　七十
『と』『に』『か』と三つつらぬる格　七十一
俗語に『デ』といふに當れる『に』の例　七十一
『もて』の意なる『して』の例　七十二
『殆』といふ語の下に、過去の辭を置る故よし　七十四
『わびしら』『こひしら』などの『ら』の用格並解　七十五
『べらなり』等の用格並解　七十六

『べみ』の用格並解　七十八
『の如く』の意の、『に』の例並解　七十九
『の如く』の意の、『と』の例並解　八十一
序歌に、五躰ある例並解　八十二
其事を、うちつけにいはず、側の物事を比喩して、本事にきかする歌の格並解　八十六
希辭、托辭、令辭の事　八十八
古風の歌にも、詞をいひかくること ある辨　八十九
俗語めきたれば、用はるまじく思はる〻語の、却て、上古にも、中昔にも歌によめる語ども
『もし』てふ語の例　九十
甚の例　九十
『すなはち』の例　九十一
『かつて』の例　九十一
『あたかも』の例　九十二
『けだし』の例　九十二
『よも』てふ語の例　九十三
一ッの『すら』の例並解　九十三
『ことならば』の『こと』の用格並解　九十四
『けるとぞ』の辨解　九十五
以上 下之巻
正　誤
八十二の三行　比喩は比喩
九十一の七行　雲公鳥は霍公鳥の誤植なり

歌文珍書保存會第一回の頒布書としてこゝに八木立禮の詞の玉緒縁接（寫本、三卷、一冊）を出す事とした、此書を著した故よしは、著者の序や緒言で明で有る、著者の小傳を添へる考で有つたが都合によつて後に出す筈の歌文樞要の卷首に載す事とした、

本書は磯野秋渚君の珍藏本を借り出て出版した、數ヶ所寫誤では有るまいかと思れる節が有つたのは大津の人森某氏にたづねて同氏の藏本と引きくらべて見てもらつて訂正した、尙外に數ヶ處いぶかしい所も有が何分一本のみで有るから十分校訂をする事が出來なかつたのは遺憾で有る、原本は振假字が多く付いて居るが、之れはこゝかしこに讀方を示すのみとして大半省畧した、送假字其他は凡てもとの通りである、引歌の誤脫は原書に溯つて訂正したが萬葉の歌のみは大方本のまゝにして置た目錄の順序は本文とくらべて多少改め又脫落して居るのは增補した、

終に望むで磯野君が秘藏本を貸與せられた厚意を深謝して置く（正宗敦夫記）

明治四十二年十月

詞の玉の緒縁接　卷之上

八木立禮著

○　二五の句に同ジ語を置く一格

日本記　ひらかたゆ笛ふき上る淡海のやけなの稚子（ワクゴ）い笛ふきのぼる

同　處女ども處女さびすもから珠を袂にまきて處女さびすも

萬葉集　あし引の山の雫に妹まつと吾（ワレ）たちぬれぬ山のしづくに

同　秋はぎにおける白露朝な〳〵玉とぞみるおける白露

同　われはもや安み子得たり人みなの得がてにすとふ安み子得たり

同　庭にたつあさでこぶすま今夜だに妻よしこせぬあさでこぶすま

古今序　浪速津にさくやこの花冬ごもり今はは春べとさくやこの花

此格は、皆右の如く、二ノ句におけると、同ジ語を五ノ句に置てとぢめたるを觀るに、第二ノ句に、其一首の中にて、主たる事をまづ云て、三四の句にて、そ

の然るよしを云畢り、さて外に云べき事なき故に、其主たる事を、うち返しいへるなり、そは、この引る歌どもを、よく味みて知べし、此格の趣意を知ざりし故にや、桂園一枝に、伊豫ノ國の松山に歸る人を送るよし端書して『君がゆく伊豫の松山としふともいよ〳〵待ん伊豫の松山』とよめるは謬なり、此歌の一首のうへにては、いよ〳〵待んが、主にて、いよの松山は、其いよいよ待んの縁に、かり用ひたるにて、客なるをや、然るを、かくいふときは、伊豫の松山を、まつごとく聞ゆる也、是は、伊豫の松山に歸る人の、年經て、また都に、のぼらんことを、いよ〳〵待んといふ意にあらずや、立禮が此格にて熊野の那智の瀧を見てよめる長歌の反歌に『那智山の神の大瀧その名さへ國中ともすに神の大瀧、また越中ノ則重のうてる太刀を鑑定せる歌に『み雪ふる越の則重夏みれどそゞろ寒けし越の則重』と、よめることありき、これ皆、かの一首の中の主たる事を、二五の句に、をりかへしたり、よく味ひみるべし、

○求て同ジ語を上下の句のうちに置て、なし なき 等の語にてとぢむる一格、

古今集　秋風の吹にし日より久かたの天の川原にたゝぬ日はなし

同　わがやどはよし野の山じちかければ一日もみ雪ふらぬ日はなし

同　千早振かものやしろのゆふだすき一日も君をかけぬ日はなし

同　するがなる田子の浦なみたゝぬ日はあれども君をこひぬ日はなし

同　おもひやるこしの白山しらねども一夜も夢にこえぬ夜ぞなき

此格は、皆此ノ日夜などの同ジ語を置るにて、詞のあやを、なせり、この日夜などいふ語、たゞ一つなるも、此集または、萬葉集、其外の集にもまれにはみえたれど、かへりて正格にあらず

○　四の句にて切り、五の句にて、また切て、云すつる格、

古今集　春の夜のやみはあやなしうめの花色こそみえね香やはかくるる

同　けふ別れ明日はあふみとおもへども夜やふけぬらん袖の露けき

同　君が名も我名もたてじ難波なる『みつともいふな逢きともいはじ

同　月夜には來ぬ人またるかきくらし『雨もふらなん』わびつゝもねん』

同　思へども思はずとのみいふなれば『いなや思はじ』おもふかひなし』

萬葉　久かたの天のかぐ山この夕ふべ『霞たなびく』はるたつらしも』

後拾遺　やへむぐら茂れるやどの淋しきに『人こそみえね』秋は來にけり』

新古今　おきあかす秋の名ごりの袖の露『霜こそ結べ』冬やきぬらん』

新勅撰　跡もなき末野の竹の雪をれに『かすむやけふり』人はすみけり』

右のごとく、四の句にて切て、また五の句にて切て、いひすつる格は、歌のたけ高くして、いとみやびやか物なるに、今是をしりて、よむ人はさら也、この格のあることをだに、しる人なき故、今こゝに擧る也、右に引る歌のうちに、新勅撰なる『かすむやけふり人はすみけり』のうたは、かすむやのやはうたがひのやなるを、烟といふ体語にてむすべる也、されば實はそのけぶりといふ語の下に、ナランといふ結辭を、そへてみるときは、うたの意明らかなり、

○　一ッ句の中にて用語を二ッに切てしらべをなせる格

萬葉　このゆふべ秋風ふきぬ白つゆにあらそふはぎの明日咲ん』見ん。

同　一日には千重しきゞにわが戀る妹があたりに時雨ふれ』見ん。

是は、五の句にて、二ッにきれたり、はじめに引るは、萩の明日咲んを見ん、といふべきを、さはいはれぬ故に、さかんみんといひ、後なるは、時雨ふれかし、吾〻その時雨をだに、妹があたりの物と見て、心をなぐさめん、といふ意なり、

○五の句第三もじに、畢のぬを置て、切て、第七もじに、はもじを置て、五の句の頭に、うちかへす一格、

古今　淡海より朝たちくればうねの野にたづぞ鳴なる』あけぬ』この夜は』

定頼卿集　みそぎする河ごしがてらよる波のかへらぬさきにくれぬ』此日は』

此格、萬葉には多くみえたれど、古今集よりこなたには、まれなる故、古風の辭（ヲニヲハ）かと心得て、中昔ぶりのうたには、つかはれず、と思ひゝがめたる人多け

れば、今中昔の人の家ノ集を引て、古風近調ともに、つかひて、くるしからぬよしをしめすなり、猶堀川百首にも、これかれみえたり、とおぼゆかし、

○ なしにの用格これと、玉の緒にも、たゞ『なしに』として擧ら今こゝに辨れたれど、そのつかひざまを、とかれざる故、ずる也、

古今　あさぢふの小野の篠原しのぶとも妹しるらめやいふ人なしに

萬葉　東路の手子のよび坂越かねて山にかねんもやとりはなしに

右の如く、なしにといふ辭を、つかへる歌、古今集、萬葉集を、はじめ其外の集にも、いと〳〵多し、さて、すべて無しは、雜音の活にて、なく　なし

なき　なけれ　なさ　なみ、と轉てかなまでにをよりの、五ッの辭をば、なきよりうけて、なき哉　なきまで　なきに　なきを　なきより、などは、いはるれど、なし哉　なしまで　なしを　なしよりなどは、うけられぬを、にのみはなしにとうけたる例多かり、そは、にはもとより連躰言よりうくる辭なれば、きより受て、なきにといふが正格なるを、截斷言なるなしよりなしにと

もうけらるゝ故は、譬へば、かのいふ人なし　やどりはなしなどの語を、一ッの体言に、したるなれば也、体言より『に』とうくるは『月に花に』などの『に』の如し猶譬へば、ずは截斷言、ぬは連躰言なれば、顔などいふ、躰言に連續るには、必ずぬよりしらぬ顔とやうに、のみいふべきを、しかいへるは、かへりて少く、しらず顔とつづけたるが、多きがごとし、なほいはゞ、このなしにとしらずがほと類し、なきにとしらぬかほと類す、と心得べし、またなしに　しらずがほ　いはゆる合躰言、すべて、合躰言に、いひなすときは、その下の語、になごりてよばるゝ音ならば、皆、にごりてよぶべし、なきに　しらぬかほは連躰言にて、ときぎぬ、やけ野』とくきぬ、やくる野、の差別のごとし

○ ずがほ　ぬかほ　ゑらずがほ　ゑらぬかほ　きかずがほ　きかぬかほ　の用格

古歌にしらずがほ　きかずがほなどある、すがほは、上にいへる如く、しらずきかずは截斷言なるを、一ッの躰言にして、また顔てふ躰言に、かさねたるなれば、いとゆる合躰言にて、下のかほのかもじ、おのづから濁りてがほと

が　か　ノ清濁ヲヨク味ヒ見ルベシ

なる也、そは、たとへば、山と川とは、おの〳〵一ッの躰言なるに、たゞ山と川とを並べいふときは、やまがはと、すみていひ、山にて流る川をいふときは、やまがはと下のかもじにごりていふが如し、またしらぬかほきかぬかほといふときは、しらぬきかぬは連躰言なれば顔といふ躰言につゞくればしらぬきかぬは用言、顔は躰言なる故、かほのかもじおのづから清て、しらぬかほ、きかぬかほ、とやうによばるゝ也、また上にいへる、山川の譬をもていはゞ、しらずがほとやまがはと類す、としるべし、因に云、有はあらゝあるあれと活て、ありは截斷言あるは連躰言なれば、ある顔とは、いはるれど、ありかほとは、いはれざるに、そは『ある人』『ある時』などは、いへど『あり人』『あり時』などは、いはぬが如し、顔のかもじを濁してありがほとは、常にいふ也、そは、上にいへる例の如く、ありといふ用言を、一ッの躰言にして、また顔といふ躰言に累ねたるにて、いはゞる合躰言なれば、右のしらずがほ、きかずがほと同例也、と知べし、また、古今集の歌に、『あひ

にあひて物おもふころのわが袖にやどる月さへぬるゝかほなる』とあるぬるかほを、誰もみなぬるゝがほと濁りてよめど、合躰言にぬれがほといふ時こそ、かほをがほども濁りてはよめ、『ぬるゝは所謂連躰言なれば、ぬるゝかほと清てこそは、よむべけれ、伊勢物語廿三段に『せんざいのなかに、隱れ居て、かうちへいぬるかほにて見れば、』とある、いぬる顔のかほも、清てよむべし、これまた、かの連躰言の例なれば也、『ぬれがほ』の例のごとく、『いにがほ』と合体言にいふ時こそ顔を『がほ』とは、濁りても、よむべけれ

○ずに、とうけたる例並解

貫之集　いづかたに立よれとてか春がすみおもはずにのみ空にみもらむ

爲忠百首　おもはずに時の鳥こそ來啼なれ世をうみはつるみなと入江に

などみえ、また今も、知ラズニ云ズニなどいふずは截斷言、には連躰言より受る辭なれば、しかは、云はるべからざるが如く、おもはるゝに、右の如く、古歌にもよめる故は、上にもいへる如く、このおもはず。しらずいはず。な

245394

どいふ語を、一ッの躰言にしたるにて、上の條に擧たるしらずがほ きかずかほと同例也、またぬは連躰言なればもとより、その連躰言よりうくる辭なるにを下に置て、ぬにといふときは、かのしらぬかほ、きかぬかほと同例になる也、

○ ながらの用格

是も上の、ずかほの例の如く、合躰言にて、たとへば、近はちかながら』つらきは、つらながら』うすきは、うすながら』露けきは、露けながら』とやうにいふ格なるを、今の世の歌人等、大かたは、連躰言より受て、譬へば、近きながら、つらきながら、うすきながら、露けきながら、とやうにはいふべく、ちかながら』つらながら』うすながら』露けながら、』とと、かへりて、いはれざるべく、おもひたゞめるは、なか〳〵のひが心得なり、

伊勢集 關越る物とはなしにちかながら年にさはらで花をみるかな

同 玉かづらわかるゝことを君しらばつらながらだに絶じとぞおもふ

同 時雨にもぬれとぬれぬる言の葉はうすながらにも散ずもあらなん

元眞集 別てばおもひ出よと朝ぼらけ露けながらもぬるゝころもぞ

など、みえたるにあらずや、またありながら、しりながら、たちながらとやうにはいへど、あるながら、しるながら、たつながらとやうに連躰言よりうけては、いはざるにて、かの近きつらきなどの如く、雜音の活き語よりうくるながらも、かの合躰言にて、ちかながら』うすながら』とやうにいふべき理なるを知べし、そは、あり しり ぬれなどもありがほ、しりがほ、ぬれがほとやうに、有、知、濡、の一ッの躰言になりて、また顏てふ躰言にあへるにて、ありしりぬれともに、ながらにかさなるときは、ありながら しりながら ぬれながらといふべき理なるを知べし、さてまた、このながらは、躰言よりうくる語なることは拾遺「体」淵ながら人かよはさじ』後拾「体」『鹿の音 ながらうつしてしがな』などにても知べし、『淵』『鹿の音』ともに躰言なり

○ 見ゆの用格

古今　さ夜中と夜はふけぬらし雁が音の聞ゆる空に月わたる　見ゆ

とある、見ゆを、四段の活語第三の音より立はたつ見ゆ、相はあふ見ゆ、などやうに、うくるときは、『たつ』『あふ』ともに、截斷言と、連躰言との兩かたに、つかはるゝ語なればつかひ謬ることなけれど、その立相等の語を、有變格ラ行にかさねてたてらむたてりたてる　たてれ、あへらむあへりあへる　あへれ、とやうにいふときに、かの見ゆ、とうくるには、必ずたてり見ゆ　あへり見ゆといふべく、たてるみゆあへる見ゆとは云べからず、とかたく心得置べしそは

古事記下　おきの、波折なをりをみれば、あそびくる、遊來しびがはたてに、鮪鰭都麻多豆理美由

萬葉六　あま少女玉もとむらしおきへ波かしこき海に船出爲利所見

同十五　久かたの月はてりたりいとまなく海人のいさり火ともし安敞里見由

などあるにて思ふべし、其故は、都麻多豆里美由　船出爲利所見　等毛之安敞里見由などの、ツマタテリ　フナデセリ　トモシアヘリを、一ッの躰にとりな

して、その事が、見ゆといふ意なれば、なり、されば、卷七に『印南野は行過ぬらし天傳日笠の浦に波立見』同卷に『海人小船帆かも張れると見るまでに鞆の浦わに浪立有所見』とある波立見　浪立有所見も共に、ナミタテリミユと訓べし、さてまた、こは誰が心にも、たてる見ゆ　あへる見ゆとは云ふべく、たてり見ゆ　あへり見ゆとやうには、却て、いはれざるべく思はるゝ故にや、芳宣園の翁は、歌學詠歌ともに、世に勝れたる先達なりしかどうけらが花、紅塵集等をみるに『かきくらし雨もふる江の水ぎはに蓑毛ぬらして鷺たてる見ゆ、とよまれたる歌あるは、右の都麻多豆理美由。船出爲利所見。等毛之安敞里見由に、心づかれざりし故なり、かの翁のうへにすら、この謬あれば、況や、今の世の詠歌者流に於てをや、よく〳〵、心得置べき所なりかし、

芳宣園ハ千蔭翁ノ號ナリ

○　ばかりに用格二つある事

ばかりといふ語に二義あり、そは、物事の形樣をいふとき、俗語に、ホドグ

是バカリヲ俗語ニコレホドコレグラキ

コレダケナドイフガ如シ

是バカリヲ俗語ニハコレバッカリトイフナリ

ラ井　ダケなどいふに當れると、そは『かぞふばかり』『とがむばかり』などを俗語にていふときは、『カゾヘルホド』『トガメルホド』といひ、また、躰言よりうくるも、伊勢物語に『ひえの山をはたちばかりかさねあげたらんほどして』また、『鳴ばかりの大さしたる鳥の』などある『ばかり』もみなかの『ホド』のこゝろ也また物事を限ていふとき、俗語に、バッカリといひ雅言にのみといふ語に似たるとの二ッなり』さてかの、ホド　クラキ　ダケなどいふ義なるばかりは必ず截斷言よりうけて

古今　雲井にも迪ふ心のおくれねばわかると人に見ゆばかりなり（ユルダケ）

後撰　梅の花よそながらみん吾妹子がとがむばかりの香にもこそしめ（トガメルホド）（スギルダケ）

古今　よそながらわが身にいとのよるといへばたゞ僞にすくばかりなり（右の歌のすくは好と過とをかけたるなり、『過ぐ』は切ル辭也）

後撰　おもひきやあひみぬ事をいつよりとかそふばかりになさんものとはなどやうにつかひて、見もるばかり　とがむるばかり　かそふるばかりとやうにはいはず、またかの、俗語には、バッカリといひ、雅言にはのみといふに似たるばかりは、必ず連躰言よりうけて、

後撰　春くればさくてふことを濡衣にきする（キセルバッカリ）ばかりの花にぞありける

とやうにつかひて、きすばかり、とやうにはいはず、そはみゆ　とがむ　かぞふは截斷言、きするは連躰言なるにておもふべし、因に云、玉の緒卷ノ六なる畢ノのぬの條に拾遺『うつろはんことだにをしき秋はぎにをれぬばかりもおける露かな』同書『かぎりぞとおもふにつきぬ涙かなおさふる袖もくちぬばかりに』などの歌を引て、此格を今の人は、おほくは誤りてをれぬばかりもといふべきをば、をるゝばかりといひ、くちぬばかりといふべきをば、くつるばかりにといひ』云々と云れたるは、さる事にはあれど、このばかりには、二義ありて、その義によりて、そのうへの用語（ハタラキコトバ）も、截斷かたよりいふとの、差別ある事に、心づかれざりしにて、粗（アラ）しと云ふべし、かのをるゝのみ　くつるのみといふ義の時ならば、などてをるゝばかり　くつるばかりといはれざるべき、○また若狭の妙玄寺義門、やちまた疑問といふ物をかきて、後ノ鈴屋翁に、詞のやちまたのうちにて、うたがはしき、ふしぐゝを

問ひしうちに『大かた俗語に、ホド ダケなどいふ意のばかりは、截斷言よりうけ、のみといふ意のばかりは、連躰言よりうくる例とおもへるに、古今集に『雲井にも通ふ心のおくれねばわかると人にみゆばかり也』とある歌のばかりは、かののみの義なるを、截斷言の見もとうけたるは、いかなる故に上と問ひしは、玉の緒六の卷の説よかの歌のみもばかりを見もるのみの意と解し誤りたるにて、是はた粗しといふべし、かの歌の意は『雲井にも通ひて、君につきそひ行こゝろは、少しもおくれず、君をはなれざれば、たゞ君を別る、と人の目に、ミユルダケの事にこそあれ、實は君をば、須更も離れぬ物を、』といふ意なり、さればこの見ゆばかりのばかりも、猶かのホド ダケ、などいふ意なるをや

○ おもひきやの用格

すべて上におもひきや、といふ語あれば、必ず下にとはとの二ッの辭をおき下におもひきや、といふ語あれば、必ずその上に、とはとの二ッの辭を置く

が定例なるよしは、誰も皆知れゝど、そのそと そのの二ッ辭にて、うくるうへの辭にも、定例ある事には、心づかざる故に、ともすれば、誤ること多かり、そはまづ、おもひきやのきは過去の辭、やは反語の辭にて、その過去の時より、さし當りたる、この今と、おもひしをりには、かやうの事のあるべしと、やは思ひし、かくあるべしとは、おもとざりき』といふ意なれば、その過去より、今を思ひしは未然、この今より、その思ひし時の事をおもへば、過去なる故に上か下かに、おもひきやと置んには、必ずまた、その下か上かに、んべし じ等の、未然をさす辭を置て、その辭より、とは とと受るが定格なり、そと心得べし、

古今　おもひきやひなの別れにおそろへて海人の縄たぎいさりせんそは未然

新古　年たけてまたこもべし未然そ　おもひきやいのちなりけりさやの中山

後撰　かけてだにわが身のうへをおもひきやおんそし春の花を見じ不未然そは

とやうによめる歌の、せん べし じ共に未然の辭なるもて知べし、

○ぞ有けるの用格

ぞ有けるのぞは、治定して、つよく指辭（サステニテハ）、けると過去の辭、とまでと今の詠歌者流、大かた心得たゝめれど、このぞありけると、何事何物のうへにても、その事、その物、の然る所以に、はじめて心づきて、發明せしをりに、つかふ辭なることは、夢にも知れる人なき故にや、この用格を、誤れる歌、多きならん、故に、今古歌を引て、しかるよしをさとすべし、

古今　梅花にほふ春べはくらぶ山やみにぞゆれどしるくぞありける

同　日ぐらしのなきつるなべに日はくれぬとおもふは山の陰にぞ有ける

同　秋かぜに聲を帆にあげて來る船は天の戸わたる雁にぞ有ける

同　みどりなるひぜつ艸とぞ春は見し秋は色々のはなにぞありける

同　消はつる時しなければ越路なるしら山の名は雪にぞありける

同　おもふとちまとゐせる夜はからにしきたゝまく惜き物にぞ有ける

同　限なき君が爲にとをる花は時しもわかぬものにぞありける

貫之集　空しらぬ雪かと人のいふなればさくらの冬は風にぞありける

貫之集　ふる里にさける物からさくら花色は少しもあれずぞ有ける

元眞集　白雪のふれるあしたのしらかゆはいとよくにたるものにぞ有ける

重之集　こひしさにみもやとみれと水かゞみしづむ影にはそはずぞ有ける

此格は、延喜天曆の頃の人の、好みてつかひし辭とみえて、三代集の作者の歌に、殊に多し、されどみな、その一首の意を解しみるに、かの何事、何物にもあれ、その事、その物のうへに、はじめて心づきし、ときよめる歌にのみつかへりさてまたどありけるのつゞまりたるざりけるかりけるべかりけるなど、皆この有より、約りたる辭なれば、右のぞありけると、同意なりとしるべし、

○にこそ有けれの用格

是も、上のぞありけるの如く、何事、何物にもあれ、その然る所以に始て心づきし時に、いふ辭なる、うちにもこそのかゝりなる故、語ノ勢ヒあまりて、譬へば、世にこそ有けれ、といふときは、世にこそ有けれ、世にあらざる事

は』かつてなき物を』とやうに、反覆(ウラカヘ)して、其然所以を、つよく推きはむる意の辭なり、

古今　かつみえて別れもゆくか逢坂は人たのめなる名にこそありけれ

同　かへる山何ぞはありてあるかひは來てもとまらぬ名にこそ有けれ

同　あしひきの山たちはなれゆく雲のやとり定めぬ世にこそありけれ

同　身をうしと思ふにきえぬ物なればかくても經ぬる世にこそ有けれ

同　秋といへはよそにぞ聞しあだ人の吾をふるせる名にぞありけれ

信明集　うき事もきこえぬ物をうきしまは所たかへの名にこそありけれ

猶三代集の頃の人の歌に多かれど、上にいへる意ならぬは、ひとつもなし、さてこの世にこそ有けれ』名にこそ有けれ』を世にぞ有ける名にぞ有ける、ともいはるべき理はあれど、しかよめる例、一ッもみえざるに、ある人の、夏ノ旅といふ題にて『越わびて汗もしとゝの夏衣うすひは山の名にぞ有ける、』とよめるを、京師のある宗匠家城戸千楯の、いたく賞(ホメ)けるよし、其作者予に話(カタ)りし

此にこそは世名の二語に多かり

かば、予、こゝは必ず名にこそ有けれといふべき格なるよし、古歌を多く例に引て、いひさとしゝかば、其人いたく感服せしことありき、

○　なりけりの用格

是は、躰言、または連躰言よりうくるゲヤといふ俗語なりの下に、かの存外にあてゝみるの意なるけりの、そはりたるにはあれど、其用格は、上に擧たるにぞ有けるにこそ有けれの如く物事のうへにつきて、其然るゆゑに、始て、心づきし折にいふ辭なり、

古今　よそにのみあはれとぞ見しうめの花あかぬ色香は折てなりけり

同　きのふといひけふとくらして明日香川ながれて早き月日なりけり

同　涙川なに水上を尋ねけん物おもふときのわが身なりけり

同　つゝめども袖にたまらぬしら玉は人をみぬ目の涙なりけり

同　人ふるすさとをいとひて來しかどもならの都もうき名なりけり

などある歌どもの意を、よく味ひ見よ、みな、かの物事の、その然る所以に、

はじめて、心づきていふ意の辭なり、

○ まし物を ましをの用格

すべてましは未然を指て、しかせん しかならんとやうに、その事、その物のうへを、豫めいふ折に、つかふ辭なれど、其下に物を をなどの辭をそふるときは、物事のうへにつきて、悔る意になる也、其故は、すべて物をといふ語は、其物事のうへを、云出、うちかへして、歎き悔る意につかふ語なれば也、そは今も俗に『カウシタナラバ、ヨカツタデ、アラウ物ヲ』『サウセウデアツタモノヲ、などいふ語の、物ヲにても知べし、

古今　水のうへにうきたる船の君ならばこゝぞ泊といはまし物を
　　君ハ、舟ニハアラザレバ、ココゾ泊ト云レヌハ、悔キコトカナ、

古今　早き瀬に海松布おひせばわが袖の涙の川にうゑまし物を
　　ワガ袖ノナミダ川ニハ、人ヲミルメヲ、ウエンヨシナキハ、殘念ナルコカナ

同　人しれず絶なましかばわびつゝもなき名ぞとだにいはまし物を

同　思ひつゝぬればや人のみえつらん夢としりせばさめざらましを
　　ユメトハ知ザリシ故ニ、ソノユメヲサマシコノクヤシサヨ

同　老らくの來んとしりせば門さしてなしと答へて逢ざらましを
　　老ラクノ來ントイフコヲ知ザリシユヱ逢シコトノ悔シサヨ

など、かたへに添たる語にて、その用格としるべし、

○ 上に切レたる處ある歌は、下にぞをおくべからざる事、

すべて、上に、んらんし過去けんけり等の辭を置て、切りたる歌は、必ず下の句に、ぞかゝりの辭のぞをおかず、のを置て、其のもじの結辭を置くが、定格なり、

古今　春たてば花とや見らん雪のかゝれる枝に鶯のなく

千載　みやぎ野のはぎやをじかの妻ならん花咲しより聲の色なる

拾遺　神南のみむろのきしやくづるらん立田の川の水のにごれる

後拾　あふ坂の關をや春もこえつらん音羽の山のけさはかすめる

古今　あかざりし袖の中にや入にけん／わがたましひのなきこゝちする
新古　ほとゝぎすふかきみねより出にけり／外山のすそに聲のおちくる

右の如く、みな、うへに切レたる所ある歌の、下の句には、必ずのをおくが定例なり、その故は、譬へば、はじめに引る、古今集の歌にていはゞ、『白雪ふりかゝれる枝にて、鶯のなくは、春のたちぬる故に、かの鶯も、折からの物なれば、この寒き雪をさへ、花と見まがへて、啼ならん、』といふ意にて、鶯のなくのなくの下に、はもじを加へて、上の切レたる所まで、うち返しみる格なれば也、しかるを、こゝにぞとおくときは、『鶯ぞなくは、とはいふべからざるにてもふべし、桂園一枝に『うき雲のあはたの奥やしくるらん／音羽の山ぞみえずなりゆくとよめるは、かの、乃をぞに誤れるにて、この格を知ざりし故なり、新古今ニ西行が歌『秋しのや外山の里やしくるらん／伊駒が嶽に雲のかゝれる』とあるにても、知るゝをや、杜撰といふべし、

○　上にきれたる所あるに、下にぞと置ても、かなへる格

千載　くれて行秋をや水もをしむらん／紅葉なかれぬ山川ぞなき

是も五ノ句を山川のなきといふべき格のごとく、おもはるれど、しからず、その故は、上に擧たる格は、下の句より、上の句にかへりて、一首の意通じて斷ず、是は上の句、下の句、別々に、よみなしたる格にて、是を、俗語もて、いはゞ『暮テ行秋ヲ、水モ惜ムノデアラウカ』サウトミエテ、紅葉ノ流レヌ山川ト云ウテハ、アレアノ通リナイ』とやうの意なれば、よみざまはいとよく似て、趣意は、いたく異なり、よく味見て、おもひ誤ることなかれ、

○　上にけりと置て、五の句を、けんにて、とぢむる格

伊勢集　梅の花かたみのこさず散にけり／かこひてだにやのこさざりけん

かやうに、上にけりと置て、下をけんとぢむるときは、上下の句貫通して、一意になる也、是を、今の人は、ともすれば、らんと置あやまること多かり、しかるときは、上のけりは、過去の辭なるに、下のらんは現在を推量する辭なれば、『らん』を、疑ひの辭、または未來の辭、などおもふは非也、上下の句意、矛盾（クヒチガフ）なり、今の人の歌を集

たとひあなが
ちにらんとお
かんにも上に
ぞや何等のか
ふりなければ
らしとおくべ
き處なるをや

たる、鰒玉集、といふ集に、『さよきぬたうつ音遠くなりにけり中山おろし吹かはるらん、とよめるが如し、この歌、作者の意は『今までは近やかに聞えし、砧の音の、俄に遠くなりしは、此方へ、吹來し、中山おろしの、吹かはりて、かなたへふき行故にや』といふことなるべければ、吹かはりけん、とおかでは、さはきこえざるなり、そは、風の吹かはりて、後にこそ、砧の音は、遠くもならめ、それを、吹かはるらんとおくときは、俗語に、吹カハルデアラウといふ意なれば、いまだ、吹かはらざるほどに、いふ辭なるをや、こゝは俗語に『吹カハツタデアラウ』といはでは、きこえぬ處なり、これ則『けん』の義なり、

○ また

後撰　春かすみたな引にけり久かたの月のかつらも花やさくらん

とあるは、上下の句意、別々にて、まづ霞の立るを見て、春がすみ棚引にけり、といひすて、さて、是によりておもふに、月中なる桂の樹も、今よりや花のさくらん』と思やられし意なれば、上にひける、けりと置て、けんととぢ

めたる格とは、いたく異なり、そは、上にあげたるけりと切て、またけんとぢめたる格は、是がかくなりし故に、かれがしかなりしならん』かれがしかなりし故に、これがかくなりしならん、とやうに其辭は、上下切レたれど、意は、上ノ句より下ノ句に通ひ、下ノ句より、上ノ句に通ひて、此理を推て、かの事におよぼし、かの理を推て、この事におよぼす意の詠格なり、こゝにあげたるけりと切て、らんと云すつる格は、その事その物の、しかるを見て、しかじかありけり、といひすて、それにつきて、わが心に思ふことを、しかぐやあるらん』といふ意の詠格なれば、上下ノ句、意も、辭も、共に清く斷たり、立禮、この格に倣て、海邊霞といふ題にて『韓(カラ)の崎かすみの底になりにけり海底石(イクリ)の海松(ミル)も花やさくらん』とよめる歌あり

○ 上にらんと置て、下を、半過去の辭にて結へる格、

拾遺　神南のみむろの岸やくづるらん龍田の川の水のにごれる

新古　秋しのや外山の里やしぐるらん伊駒が嶽に雲のかゝれる

などあるくづるらん、しぐるらんは、現在の推量にて、俗語にて、いはゞ、クヅレルデアラウ、シグレルデアラウなどいふに當り、にごれるかゝれるは、半過去にて、俗語にていはゞ、濁ッテアル、カカッテアル、といふに當れゝば、一わたりうちきく時は、上下の辭、矛盾（ウチアハヌ）ごとく聞ゆるに、よく按ひみれば、其意明らかに通じたり、まづ、右の歌どもを、俗語に譯して說んには、はじめに引る歌は、川上ノ、神南ノ三室ノ山ノ岸ガ、今、ダンダント、クヅレル、ノデアラウカ、コノ、龍田川ノ水ガ、コノヤウニ、濁ッテアルノハ』といふ意、次に引る歌は、今、秋篠ノ外山ノ里ガ、シグレルデ、アラウカ、アノヤウニ、伊駒ノ山ニ、雲ガカカッテアルノハ』といふ意なれば、上にらんと現在にて推量する意の辭を置き、下にれると半過去の辭を置る也、さて、同じ格にてよめる歌にはあれど、堀川百首に匡房卿『駒迎の題にて『ひく駒の蹄やひづらん』逢坂の關の清水の底のにごれる、とよまれたるは、上下の意、矛盾して、聞えぬ歌也、其故は、上に『ひくこまのつめやひづらん』と置れたるは、俗語に『ヒクコマノ蹄ガヌレ

ルデ、アラウカ』といふ意なれば、未だ、駒が、關の清水を、わたらぬ程の事に聞ゆる也、然るを、下に、關の清水の底のにごれる』と置れたるは俗語に、關ノ清水ノ底ガ、濁テアルノハ』といふ意なれば、已に渡し後の事に聞ゆる也、そは已に駒が、蹄をぬらして、清水を渡りし後にこそ、その清水の、底はにごらめ』未だ駒が、蹄をぬらして渡らぬ前に、其清水の、底の濁り有べき、理あらんやは』されば、この歌にては、ひく駒のつめやひぢけん、といはでは、聞えぬ也、予が此論は、廿年前に、若狹にて義門に話りしを、かの人、活語雜話、といふ書にこの論をも、予がそのをりの寓名をもあげたり

○てをかなと置て調をなせる一格

後拾遺　狩くらし交野の眞柴をりしきて淀の河瀨の月を見るかな

新古　あふみぢや眞野の濱べにこまとめてひらの高峯の花をみるかな

などよめる歌の、てのうへの語は、皆、わが施爲（モトノテスル）事につきていひ、をは、その見る物、聞く物につきて置き、かなは、その見るよし、聞くよしを感歎するに、つきておける也、是を俗語もていはゞ、吾ガ、カウシテ居テ、彼ヲ、カウスル

コトカナ、といふ意なれば、そのて、と受るうへの語は、必ず、わが、自ら施(モトノチ)爲(ス)る、事をいふ語ならでは、おかれぬ理なり、古歌にも、まれには、この格にて、よめる歌に、うへの『て』もじなきも、みられど、そは正格にあらず、下の『かな』をば他の辭に、かへたるもあり、新古今『こよひたれすぐ吹風を身にしめてよし野の嶽に月を見るらん』などの如し、然れども、是はた『て』もじの、うへに、然るを、今の世に、は、『しめ』てふ施爲の語を置て、五の句に『を』を置り、名ある人のよめる歌に『卯まくらかりねの床の夢さめてしらぬ野寺の鐘を聞くかな』とあるは、歌の姿こそ、よく右の格に似てはあれど、謬なり、芳宣園の翁の馬上聞雁、といふ題にて『秋の野に尾花あし毛のこまとめて空もく雁の聲をきくかな』とよまれたるは、よく叶へりそは夢さめてのさめは、自然をいふ語、さましは施爲(モトノチスル)をいふ語なれば、こゝはさまして、といはでは、右の例に叶はぬ也、また、近世名高かりし某先生(ナニガシセンジヤウ)の『ふじ筑波あらそひたてる東路の利根の川瀬に月を見るかな』とよまれたるも、わろし、その故は、右の格は、てをかなの三ッの辭にて、調べを叶へたるなれば、この歌、利根の川瀬にしかく〳〵して月をみるかな、とか『しかく〳〵して利根の川瀬に月を見るかな、とかてもじを置ずしては、とゝのはぬ也、また、其、先生の高弟、

何がし宗匠が、湖邊夏月、といふ題にて『ほと〻ぎすなくや音羽の山こえて大津の濱の月を見るかな』とよめるを聞て、予その人の弟子に、云けるやうは、すべて濱といふは、漢籍に海濱河濱などつかへるは海川などのホトリをいふ語にてすでに詩文などには、濱の字を、直にホトリと訓じた海川に側る地を、いへる語なるに、此歌、はまの、と置れたる、恐らくは謬らん、一首の意にては、『濱にて見る』『濱より見る』などの意に、き〻なされば、濱にと置てよろし、そは、よし野の嶽に月をみるらんまた、強て、のとおかまほしくば、はまを湖と改て、うみのとせられば、またよろしからん、しか雌黄(ナホス)ときは『子規のなく、音羽の山を越て、其所より、遙に大津の湖の面にうつれる月を見る、意に、聞ゆれば也、と深切(マノヤカ)に教諭(サトシ)けるを、その弟子より傳聞て作者いと拙きまけじ心に、陳じけらく、わが此歌は、後拾遺集に『狩くらしかた野の眞柴をり敷て淀の河瀬の月を見るかな』とある歌によりて詠るを、知ずして、難ずるは稚し、と陳じけるこそ、かへりていと〳〵稚けれ、そは、かの『淀の川瀬の月を見るかな』とよまれたるは、『交野(カタノ)』にて、眞柴を折

敷て、そのかた野より、よどの川端(カハセ)に、うつれる月を、見る意なれば川端のの『の』は『なる』のつゞまりたる『の』にて、實は『川瀬なる月』といふ意也、そは難波なる三津を難波の三津、といひ『駿河なる富士を』『するかのふじ』ともいふが如し、また『なる』は『にある』也かの陳者の『音羽山を越て、大津の湖面に、うつれる月を、見る如く、にもきこえ、または『大津(ウミノホトリ)の濱より、大空の月を、見るが如くにもきこえ、または『大津のはまより、大空の月を、見るが如くにも、きゝなさるゝ贋歌(エセウタ)ののとは甚じく異なるにあらずや、とにかくに、右の三人の作者、古歌をも、よくは解せず、語學をも、露せざるゆゑ、右の如き謬はあるぞかし、

詞の玉の緒よりつぎ卷之上終

詞玉の緒よりつぎ　卷之中

八木立禮著

○下に意を含めてといひ居(スウ)る格

萬葉四　朝日影にはへる山にてる月のあかざる君を山ごしに置(オキ)手。
　　○別るはいと〳〵くるしき事よ

同七　ありそこす波はかしこししかすがに海の玉藻のにくゝは有受(アラズ)底。
　　○見すてがたきかも

同　戀も今はあらじとおもふを何方より戀の奴の擱かゝり手
　　○かく物をおもはしむる

同八　山びこのあひとよむまで妻ごひに鹿なく山べに獨のみ爲(シ)手。
　　○物を思ふかも

同九　ひろ橋を馬こしかねて心のみ妹がりやりてわはこゝに思手。
　　○こひわたるかも

忠見集　はかなくて花のちり〳〵まどひなばもくへもしらぬ春におくれて。
　　○なげきをするかな

右の如く、下に意を含めて、てとゝぢむる格は、萬葉集、その外の家集などには、これかれみえたれど、いかなる故にか有ん、古今集より始め、詞花集以上の撰集には、をさ〳〵見えず、また、近世搢紳家(ダウジヤウカタ)によりて、歌よむ輩のよめるには、此格多かれどとゝのへるはいと〳〵希なり、そは、ある地下宗匠とかきこえし何がしが歌に『小簾まきて雪には近くみし山もけさはかすみの遠くへだてゝ』またある先生の歌に『みかへれば曉のかねのおとこ山みやこのなごり空にかすみて、などある、皆右の格にかなはず、そは、『て』もじの下に意の含まねば也、予が門人、備前ノ枝本貴蔭(ウズカゲ)が春曙の題にて『ほの〳〵と明る外山の花ざかりかすめる月も空にのこりてとよめるそは、右の如く、下に意は『て』の下に『えもいはれず面白き哉』と含めりそは、右の如く、下に意の含む歌ならでは、留らぬ故をしらずして、みだりに物すれば也、

○ 下に意を含めて、てかとぢむる格、

萬葉十二　たらちねの母のめす名をまうさめどみちもきびとを誰と知而可。　○申さん

此格も、右の如く、下に意の含む歌ならでは、留ずと知べし、

○ 下に意を含めて、にと云居る格、

是則集　みるめかる蜑の往來のみなとぢに莫越(ナコソ)の關も吾はするゑぬに。　○人の來ぬはいかにぞや

兼盛集　なには江にしげれるあしのめもはるにおほくの世をば君に〻とぞ思奉ん

此格も、右の如く、下に意の含む歌ならでは、留ずと知べし、

○ 下に意を含めて、にかといひ居る格、

能宣集　さくら花まだきなちりそ何により春をば人のをしむなるにか。　○あらんとおもふぞ

此格も、右の如く、下に意の含む歌ならでは、留ずと知べし、

○ 下に意を含めて、へといひ居る格、

玄々集　五年はしるしの杉につかへてきことしはうめの花のみやこへ。　○のほる事哉

萬葉一　いざ子ども早日本邊(ハヤヒノモトヘ)〻おほとものみつの濱松まちこひぬらん　「歸ん

貫之集　吾にしも艸の枕はこはなくに物へ〻ときけばをしくぞありける　「もく

此格も、右の如く、下に意の含む、歌ならでは、留ずと知べし、

○ 下に意を含て、ばにていひ居る格

萬葉十　人言は夏野の艸のしげくとも妹と吾としたづさはり宿者（チハ）。嬉しからまし

興風集　山の井は水なきごともみえねども秋の紅葉の散てかくせば。みえぬなり

金槐集　きのふまで雲井を翔し鴈が音もかゝる姿になりぬと思へば。かなしき事よ

散木集　櫻だにちりのこらば／何をかおもはまし／といひしかど花見てしもぞ春はさびしき

此格も、右の如く、下に意の含む、歌ならでは、留ずと知べし、

○ 結句の下に意を含めて、とぢめたるかゝり辭のぞの例

後撰　君が爲いはふこゝろのふかければひじりのみ世の跡ならへとぞ。おもふ

興風集　白波におりはへ蜑のこぐ船は命にかはるみるめかりにぞ。もくなる

此格、文章には、とぞ にぞなど、おほくつかへれど、歌にはまれなり、然れども、是また一格なれば、擧る也、是も上に擧たる格ともの如く、下に意の含む歌ならでは、居らぬ也、

○ 呼かくる辭のいかに

萬葉七　波高し奈何（イカニ）かぢとり水鳥のうきねやすべき猶やこぐべき

とあるいかには、今俗にドウヂヤといふ語に當りて、他に對して云かくる語なり、この語、後世の軍書、あるは謠本などいふ物には、これかれ用（ツカ）ひたれど、歌にも、文にも、多からず、されど定かなる一格にて、殊に、いとみやびやかなる辭なるに、詞の玉の緒、四の卷なる、何の部に、もらされたれば、今こゝに擧る也、

○ ばいかにとつかへる格、

萬葉七　玉津島よく見ていませ青によしならなる人の待とはゞ如何（イカニ）

同　大海の波はかしこしかれども神を齋（イハヒ）て船出せ者如何（バイカニ）

是も、上の呼かくるいかにと同意なれど、ばいかにとつゞけたるが一格なれば、別に擧る也、

○ いかにせん いかがせんの差別

總て、このいかにせん、いかゞせんを、今の人は、皆から同義とのみ心得たゝめれど、古歌によりて、その用格を質し見るに、大き差別あり、そは、まづ、いかにせんは今俗にコレハマアドウセウゾといふ語の意にて其所置を、心に、とやかくや、とおもひたどる意なり、

古今　なとり川瀬々のうもれ木あらはればいかにせんとかあひみそめけん

拾遺　いかにせん命はかぎりある物を戀はわすれず人はつれなし

後拾　いかにせんあなあやにくの春の日や夜半のけしきのかゝらましかば

同　いかにせん山の端にだにとゞまらで心の空にいでん月をば

今撰和歌集顯季朝臣集　いかにせんかゝるためしはかたし貝ならびふせてもあはでやみぬる

いかにせん野澤におふるまろすげのまろすげもなき戀にしぬべし

などある、歌を、よく味みておもふべし、皆、右にいへるごとく、今さし當りて、そのせんかたを、おもひたどる意也、

さていかがせんは、今俗に『ドウセウゾ、ママヨ、セウガナイワといふ語の意にて、その事を、棄放(ステヤル)意なり、俗にアキラメルといふ語の如し

古今　思ふともかれなん人をいかゞせんあかず散ぬる花とこそみめ

新古　絶てやはおもひありともいかがせんむくらのやどの秋のゆふぐれ

などの歌にておもふべし、かの、いはゆる物事を思ひきりて捨置意なり、伊勢物語にも上畧『さる、あづまびとの心には、いかゞせんは』などあるも、皆この意なり、

○ いかにぞやの例

齋宮女御集　いかにぞやなのりそれかと問んにもわすれる里や蛍はつけまし

いかにぞやのやは、よびかくる意のやにて、よといふに同じ、この辭文には、多くつかへれど、歌にはまれ也、されど、是はた何の部類にて、一格なるを

コノ辭一ノ句ニオケルモ同ジ今思イヅルママニ右ノ二首ヲアゲタルナレド八代集ノ中ニカズシラズ多カリ

編者云此歌一本『わすれくさとや』とあり之よくや

玉の緒に、もらされたれば、今補ひ擧る也、

○ めるかな

兼輔集　千早振神のやしろのもふばかり水のとあえて祈めるかな

元眞集　岸ちかき松にかゝれる藤の花波さへ折て歸めるかな

今の人、けるかな　ぬる哉　つるかな　なるかな　たるかな、などは、よくつかへれども、めるかな、といふ辭をば、ありとだに、しらざれば、その必ず、めるかな、と置べき所にも、他の辭を置て、誤ること多き故に、今擧る也、

『めるかな』は俗語ニハ『トヽ見エル』カナ』と、あつべし

○ らんにて切りてかなにて云すつる格、

新勅撰集　ふるさとのあれまく誰かをしむらん＝わが世へぬへき花のかげ哉

續後拾遺　今日よりや春はたつらん＝あら玉の年たち歸りかすむ空哉

此格は、その見る物に感じて、かなといひすて、さて、是につきて思ふに、しかしかの故あれば、ならん、とやうに、推量する意なれど、しか辭(ナニヲハ)を置ては、

詞の勢ひつよからぬ故に、かなとらんとを、うへしたに置かへて、一首の調をなしたるにて、上下の句、辭は清く切れたれど、意は貫通して斷ず、此格、しらべたかくして、面白き躰なるを、桂園一枝の作者など、右にいへる如き、故ある事をも知ずして、みだりに、この格に倣て、よめる歌多かれども、調へるはいと〳〵まれ也、また、鈴屋翁のをしへによりて、歌よむ輩は、かやうに切りては、よまれぬ物と、のみ心得たれば、今こゝに擧て、この一格あることを、知しむる也、すべて、かの翁によりて、歌よむ輩のよめるは、大かた、躰言にて、たとへば、『來なく鶯』『にほふ梅が〳〵』『てらす月かげ』とやうにとぢめたる歌がちにて、辭を用ひて、いひすてたるは『けり』『かな』『らん』『ず』など五ツ六ツの辭に過ず、故にその歌、みなたけみじかくして、しらべひきゝなり、

○ 與の意のとをむかへ合せ置て、下を必ず、なりけり、といひすつる格、

古今　世の中にふりぬる物は津の國のなからの橋と吾となりけり

はなきもあれど大かたはあり

此格は、八代集ノ中にも、これかれみえ、今の人も、よくつかへる歌多かるを、玉の緒なる、との部にもらされたれば、今これをあげて、一格に、そなふる也、

○ 不『ず』『ぬ』『ね』『ねば』『ねど』『ねども』『じ』『で』『なくに』の如きの辭を、一ッ置て、二所に、きかする格並解

後撰一　松もひき若菜もつまずなりぬるをいつしか櫻はやもさかなん

とある歌の、松もひき若菜もつまずは、『松もひかず、わか菜もつまず、といふ意なるを、さはいひがたき故に、もを二ッ置て、ず一ッの、二所にかゝるやうに、よみなせるにて、いと〳〵巧なる格也、さて、此用格を、解んには、まづ、もてふ辭は、此と、彼とを、指て、兼合せいふときに、用ふ辭なる故に、かく、上下に置くときは、下なるずてふ辭の意、おのづから上に通じて、ただ、ひきとのみいへるにて、ひかず、といふ意になる也、また、松もひきの、ひきは、ひかゝ　ひき　ひく　ひけ　と加行の四段に活く語なるを、上に、もの

辭を置て、もひきといひ居たる故、下なる不の辭、おのづから、上に通じて、ひきといひながら、ひかず、といふ意に聞ゆる也、されど、是をひくといひ斷るときは、縱ひ、上下に、ものの辭をおきて、下に不の辭を置けりとも、ひかずといふ意には、きこえず、却て、他の物と一同に、松をも引くことになる也、さて、また、今試に、此格を自餘の活語にて、用ひ見んには、譬へば、『雪もきえ、梅もにほはず、といへば、『雪もきえず、梅もにほはぬ意になり、『年も老い身もおとろへず、といへば『年もおいず、身もおとろへぬ意になる也、『ず』『ぬ』『ね』『ねば』『ねど』『ねども』『で』『じ』『なくに』の類、皆用ひて宜しこは、かく長き詞を、語みじかに、いひとらるる格なるを、玉の緒にも擧られず、また歌よむ輩も、近頃までは、知ざりしに、今は、語學やう〳〵に、ひらけもて來ぬれば、語學に、心いる〻輩のうちには、此格ある事をしれる人、ひとりふたりはある也、小林歌城征夷府旗下ノ士小林田兵衛元雄が落花の題にて『雨もふりあらしもふかでちる花を何におほせて今はうらみん』とよめるも、右の格にて、雨もふらず、あらしもふかでといふ意、ま

た立禮が、九月盡夕といふ題にて、『菊もかれ紅葉もいまだ散はてず殘多てくれし秋かなとよめるも、右と同じ格にて、菊もかれず紅葉もいまだ散はてずといふ意なり、されば、今のうたよむ輩も、かやうの珍らしき格は、その自已の歌にも、一首づゝ詠こゝろみんも、また、歌の稽古なり、かし

○ かならずらし、と置べき處を、大かたらんと謬る事、

総て、上にぞや何等の、かゝり辭なき歌には、必らんをばおくべからず、らしを置べし、とかたく心得おくべし、是には、ふかき故あることなれど、そまづ右の如く、こゝろ得おくとを委しくとかんには、こと長ければ、きは、つかひ誤る事、なきぞかし

古今六　徒ノ格　夕されば衣手さむしみよしののよしのゝ山にみ雪ふるらし

同七　徒ノ格　千鳥なくさほの川ぎりたちぬらし山の木の葉も色かはり行

同廿　ハノカカリ　み山にはあられふるらし外山なるまさきのかづら色つきにけり

同墨グシ　ハノカカリ　柚人はみや木ひくらし足引の山のやまびこよびとよむなり

萬葉七　ハノカカリ　印南野は行すぎぬらし天づたふ日笠の浦に波たてりみゆ

同　徒ノ格　天きらひひかた吹らし水ぐきの岡のみなとに波たちわたる

同六　同　海人少女珠もとむらしおきつ波かしこき海に船出せりみゆ

同二　同　ますらをの靫の音すなり物部のおほまへつぎみ楯たつらしも

同三　ハノカカリ　いにしへの七のかしこき人どもゝほりする物は酒にしあるらし

萬葉一　徒ノ格　春すぎて夏來たるらししろたへのころもほしたり天のかぐやま

後拾遺　同　琴の音にみねの松風かよふらしいづれのをよりしらべそめけん

新古　同　白雲のはるはかさねてたつた山小倉のみねに花にほふらし

伊勢物語　同　もゝとせにひとゝせたらぬつくもがみ吾をこふらしおもかげにみゆ

右の歌どもの如く、上に、ぞや何のかゝり辭なくして、はも徒のかりの時は、いづれも〳〵らしと置くが定格なるを、今の人は、みだりにらん、と置誤る故、かく多く、例を擧てさとす也、上に引る歌にて、たとへば『千鳥なくさほの川ぎりたちぬらし、といふべきをばたちぬらん。と誤り、『天

ぎらひひかた吹らし』をば、ひかたふくらんと誤り、『春すぎて夏來たるらし』をば、夏きたるらんと誤るが如し、桂園一枝に『月はいまうしろの山にいでぬらんあらはれそむるすまの浦なみ』鰒玉集『さよぎぬたうつ音とほく成にけり中山おろし吹かはるらん』などの歌、みな『らし』といふべき所なるが如しさて、詞の玉の緒一の卷、はも徒の結辭に、しひてらんを擧られたれど其證歌を、一本によりて見るに、皆らしとあり、されば、はも徒のかゝりの時は、必ずらしと置くに限れり、とかたく心得べし、萬葉集一『いざ子ども早日本へ大伴の三津の濱松まちこひぬらんの』『らん』には外に說あり

○ またらんとらしと、かさなれるうた、

伊勢物語 いつの間にうつろふ色のつきぬらん＝君が里には秋なかるらし

是も、下の句、うへのかゝりはなればらしと結べり、

○ 見わたせば、などのばの下に、かなをば、置べからざる事、すべて、見わたせば』または、來て見れば』けさみれば』などいふ語の下は、かならず、けり なる または、雜音の活の しき 白し、白き、し し 高し、高き、し し き うれし、うれしき、こひし、こひしき、または、鳴く 吹く 散る 咲く、とやうに、其事、

來行 くればゆけば おもへばなどのばも是に同じ

其物を、指ていふ語にて、結ぶが定例にて、右等のばの下にかなとおくことは、例も、理も、決(ウツナ)くなし、と心得置べし、

古今 見わたせば柳さくらをこきまぜてみやこぞ春のにしき也ける

同 音羽山けさ越くれば ほとゝぎす木末はるかに今ぞなくなる

同 梓弓春の山べを越くれば 道もさりあへず花ぞちりける

同 ひとりして物をおもへば 秋の田のいな葉のそよと いふ人のなき

同 あふみより朝たち來れば うねの野に たづぞ鳴なる明ぬこの夜は

同 夕されば 衣手さむしみよし野の吉野の山にみ雪ふるらし

同 雪ふれば 木毎に花ぞ咲にける何れを梅と分て折らまし

同 雨によりたみのゝ島をけふゆけば なには かくれぬ 物にぞ有ける

拾遺 おもひかね妹がりもけば 冬の夜の川かぜ寒み 千鳥なくなり

後拾 見わたせば 松もま ばらになりにけり遠山櫻咲にけらしな

萬葉 田子の浦ゆうち出て見れば ましろにぞふしの高根に 雪はふりける

新古　いそのかみふるき都を來てみれば。昔かざしゝ。花咲にけり

同　山寺の春の夕ぐれ來てみれば。入相の鐘に。花ぞちりける

同　見わたせば。花も紅葉も。なかりけり浦の苫屋の秋の夕ぐれ

續後撰　露とのみ消にしあとを來て問へば。尾花が末に。秋かぜぞふく

重之集　けふきけば。ゐでのかはづも。さわぐ也なはしろ水に誰まかすらん

とやうに、さす辭にのみ結びて、かなといひすてたる例は、ひとつもなく、また、しか結ぶべき辭理もかつてなし、その故は、すべて、みわたせば、來てみれば、行けば來れば爲れば思へば、等は、その事その物を見て、しかじかありと、その見る物、きく事のうへをさして、いひおよばさん、とする語なれば、たとへば『獨しておもへばくるし』『春されば。まづ咲く』『冬されば。人目かれもく』とやうに、その然る事、然る物のうへをさして、いひ居ざれば（スエ）その語意畢らず　そは右に引る歌どもの右のかたに●の印をつけたる所より、下の●の印をつけたる所に、語をかけてしるべし、かなは、その物、その事に感じて、自已一人歎ずる辭（ナニヲハ）なれば也、猶たとへば『來てみれば。花咲にけり』『越くれば。今ぞなくなる』等の辭は、彼がうへにのみかかり、かなは、たとへば、『時鳥かな』『山ざくらかな』とやうにいひても、彼にはかゝはらず、その物につきて吾ひとり歎ずる也、我一分（ワレヒトリ）のうへにのみあづかりて、他にはかゝはらぬ意の辭なる故に、かの來てみれば。見わたせば。ゆけば。來れば。等の如き、他のうへに及す辭の下には、置れざるを知べし、すでに縣居（アガタヰ）の翁の『みわたせば。天の香具山うねび山。あらそひたてる春霞かな』とよまれたる歌を、香川何がしが難じて、見わたせば、と置て、末にかなと結べるは、例にたがへり、といへるは、一わたり聞えたれど、おのが歌に『青淵のうづまき寺に來てみれば身も投つべき花の色かなとよめるはいかにぞや、猶いはゞ、かの翁の歌は、一の句に見渡せばと置て、五の句に、春がすみかな、と置れたるこそ、例には違ひたれど、四の句にあらそひたてるといふ用語を置れたるにて、猶いさゝかは、やるさるゝ所あれど、そは『みわたせばあらそひたてる』とは語のかゝるをもて也、たとへば『風ふけば、花のちる哉』といふときは『ふけば』の『ば』もじうへにあれど、『かな』のうへに『ちる』てふ用語あれば、辭理叶へるを、『風ふけばちる櫻かな』とやうには、置れざるがごとし難者の歌は、來てみれば。『風ふけばちる哉』とはかかれど風ふけば櫻かなとは

かゝらずその故はちるは用語櫻は体語なれば也

身も投つべき、ともかゝらず、來てみれば花の色かなとは、いよ〳〵かゝらぬをや、いかに、笑ふべき限ならずや、

○ けるかの例

萬葉七　靜にも岸には波者縁家留香此やどにして聞つゝをれば

是は、別に用格につきて、深き趣意あるには、あらざれど、萬葉集中の歌には、けるかも、後世の歌には、けるかなといふ處を、けるかといへる、定かなる一格なれば、擧る也、但しこのかは、萬葉集中なる、『苦しくもふりくる雨か。』『いぶせくもあるか。』また古今集中なる『玉にもぬける春の柳か。』『川風のすずしくもあるか。』などのかと同意にて、かも かなの義也、

○ けりやはの例

古今　おもひけん人をぞ共におもはましまさしやむくいなかりけりやは

家持集　しのゝめのひがしになれば郭公わがまつかひはなかりけりやは

此辭の用格は、『しかは、なかるべし、と思ひ居たりしに、今になりて思ひみれば、しかはなかりけりやは、しかありけり』といふ意にて、外に、深き趣意はなけれど、是もまた一格なるを、玉の緒にもらされたれば、今こゝに擧る也、

○ てふなり てふらんの例

古今　くれなゐにそめし心もたのまれず人をあくにはうつるてふなり

重之集　いとかたき岩はにおふる松だにも風のふくにはなびくてふなり

元輔集　風早みよし野の山の櫻花さかぬに春や過ぬてふらん

是は、たゞといふなり、といふらんの約りたるにて、外に深き趣意はなけれど、耳馴ぬ辭なる故、さは、つかはるましくおもふ人もあるべければ、こゝに擧る也、

詞の玉の緒よりつぎ卷之中終

詞の玉の緒よりつぎ　卷之中附錄

八木立禮著

○しを助辭なり、といふは非なる事

古今　名にしおはばいざことゝはん都鳥わが思ふ人はありやなしやと

同　種しあれば岩にも松はおひにけり戀をしこひばあはざらめやも

同　から衣きつゝ馴にし妻しあればはるゝ來ぬる旅をしぞ思ふ

同　ほのゞとあかしの浦の朝霧に島がくれゆく船をしぞ思ふ

右の歌どもの『名にしおはば』『たねしあれば』『妻しあれば』『旅をしぞ思ふ』『船をしぞ思ふ』などのしを、玉の緒に、やすめ辭のしと名目て、擧られたるは誤なり、其故は、まづ助辭といふは、譬へば、古今『夕月夜さすや岡べの、同序『難波津に咲くやこの花、新古『きりぎりすなくや霜夜の、または、古今『淡海のやかゞみの山、金葉『信濃のや木賊における、などの、やの如く、直に『さす

岡への『咲くこの花『なく霜夜の『あふみのかゞみの山を『しなのの木賊におけるゝ、といふべきを、しかいひては、一もじたらずして、句を成ざる故に、やもじを、仲際に加へて、『さすや岡への『咲くやこの花『なくや霜夜の、または、『あふみのやかゞみの山、『信濃のや木賊における、とやうに、いへるやもじの如きを、こそ、やすめ辭、とは云ふなるに、右の『名にしおはゞ『たねしあれば『旅をしぞおもふ『船をしぞ思ふ、などは、直に『名におはゞ『種あれば『旅をぞ思ふ『船をぞ思ふ、とのみ云ても句を成せるに、殊更にしもじを加へて、五ッもじの句を六もじにし、七もじの句を、八もじにしたるなればいかでかは、休め辭と、いはるべき、こは、富士谷氏の、しは其上の語を、強くきかする意の辭なり、といへるぞ、よく叶へる說にて、このしもじにて、上の『名に『種『旅を『船を、などの語を、強めたるなり、そは、萬葉集に『わが命しまさきくあらばまたも見ん、『山ほとゝぎす鳴日しぞ多き、などやうに用へるも、右の同例にて、このしもじ有りては、却て、聞よからぬ處に

さへ、かく用へるをや

○ 名にしおふと用ふは、誤なる事

後世の人の歌に、名におふといふべきに、しかいひては、一もじたらぬときは、必ず名にしおふ、と用へれど、このしは萬葉には、さまざまに、用へる例あれど、古今よりこなたの歌には其下に、必ずばもじあるか、上に擧たる『種しあれば』の類の如し又は、かゝり辭のぞの上か上に擧たる『旅をしぞ思ふ』の類のごとしならでは必ず、置べからぬ例なれば『名にしおはゞ』『名にしおへば、とは云るれども、名にしおふ、とは云るべからず、さればこそ、二十一代の撰集はさら也、その外、家々の集どもにも、六帖、夫木、などやうの、抄どもにも、名にしおふ、とよめる例は、一ッも見えざるに、今の板本の歌仙家集の中なる元眞集に『名にしおふ草の枕に思ふらんなく聲たえぬ秋の夜の虫』といふ歌、たゞ一首見えたれど、是も寫本には、皆、名におへる、とのみあるなり、されば、今もし、名におふと云ては、五もじの句に、一ートもじたらぬときは、必ず名におへる、ところそいふべけれ、

編者云備字例は關鳧翁正方(マサヒチ)の著にて備中の人なり

○ 縁(エン)をえにしと訓(ヨム)は誤なる事

今の世の人、大かたは、縁(エン)は字音(モジゴエ)なれど、えにしは中國(コヽ)の訓なり、と心得て、譬へば縁(エン)ありて 縁ある または縁也けりなどいふべき處をば、皆、えにしありて、えにしある、えにしなりけりとやうにいへれど、是も上にいへる、名にしおふの類にて、誤也、その故は、まづ、縁錢牽等は、韻鏡廿一轉、開口呼、光ノ韻の字なれば、韻のンは則ちニの字なり、このンにニとムとの差別あることは、備字例に、委はし、故に縁をえに 錢をぜに 牽をけに『牽』を『けに』とよめるは、古今集十に牽牛子(ケンゴシ)をよめる物ノ名の歌に『うちつけにこしとや、花の色を見ん、おく白露のそむるばかりを、とありとはよめる也、されば えに けにはさらなり、ぜにも固より、字音なり、さて、中昔の歌に、

『えにしあらば』『えにしあれば、などよめるは、直に、縁あらば 縁あれば、とやうに云ふべけれど、その縁てふ語を、強く、きかせん爲に、例の強むる辭の、しもじを下に添へて『えにしあらば』『えにしあれば、などよめる也、されば、あらば あれば のばもじなきには、えにしとは、云れざるをや、よく

思ふべし、

○ ワといふ俗語に當れる、なりは、物事によりて、用はれぬ事

總て、切る語より承るなりはこの事は歌文樞要に委はし俗語に『ソレガ、ドウヂヤ、ワ』コレガ、カウヂヤワ、などいふワに當りて、たとへば、『櫻散るなり』『蚊遣たく』なり『衣うつなり』『時雨ふるなりなどは、『アレ、櫻ガ、チルワ』『アレ、蚊遣ヲ燒クワ』『アレ、衣ヲ、ウツワ』『アレ、時雨ガフルワ、などいふ意にて今、目前に櫻の散るを見て、いふ意、目前に、蚊遣を、燒くを、見て、いふ意、目前に、衣を、うつを、聞て、いふ意、目前に、時雨のふるを、見て、いふ意なれば、固より、必ず、しか、いはるべき理なるに、『櫻さくなり『空かすむなり、などは、いはるべからず、その故は、櫻霞などは、花のすでに、開てあるを見ていふ意、霞のすでに、立てあるを、見ていふ意を、以て、かの俗語に『アレ、櫻ガ、サイテ、アルワ『アレ、霞ガ、タツテ、アルワ、といふ意には、よみなすべけれど、花の今、開く、處を見る意、霞の今、立ッ、處を見る、意を以

て、かの俗語に『アレ、櫻ガ、イマ、開クワ『アレ、霞ガ、今、立ッワ、とやうの意には、よむべからざる、理なれば也、されば、上世(イニシヘ)の人の歌には、『さくら散るなり、とはよめれど、『櫻さくなり、とはよめらず、『空かすみけり、などはよめれど、『空かすむなり、とは、よめらぬ也、然るを、草庵集一に、『うら人の葦刈小船かすむなり渚こぐとも見えぬばかりにとよめるは、誤にて、こゝは、必ず『あし刈小船かすみけり、といふべき處なり、また、近頃世に出たる、鰒玉集といふ物に見えたる、何がしの歌に『伏庵の垣よりうへに花みえて心たかくも紫苑咲くなり、とよめるも、例のたがへり、紫苑も、櫻など、と同じく、花なれば、今目前に、開く處を、見る意に、よむべき物にあらず、『アレ、紫苑ガ、今開クワ、といはるべくや、思ふべし されば上にいへる例にて、推さば『紫苑さきけり、といふべし、ともいふべけれど、此歌にとりては『さくしをにかな、といはん、かたぞ、增るべき、また、予、先年、備前にゐきて物敎しをり、彼國の業合大枝(ナリアヒノオホエ)が、山霞といふ題にて『かへりみるうしろの山もかすむなり向ふ

淡路の島ばかりかは、とよめるを、予かのかすむなり、とはいふべからず、かすみけりといふべき由を、言論しけるに、かの人、いと、いたく感服せし事あり、かの業合氏は、山陽道の識者にてわが、古ノ道の事どもは、いふも更なり、語格（コトバノスヂ）なども、をさ〳〵委しく、學得たる、人なるすら、猶かく、精密なる處には、心づかざる物なれば、況て、初學の輩は、よく〳〵、心せざれば、誤る事のみ、多ぞかし、

○ふれる雨、とは、よむべからざる事

ふる雨、とはいへど、ふれる雨、とはいふべからず、その故は、まづ、ふれるは、零有にて、『フリアル』の『リア』を約れば、『ラ』となる、『ラ』を『レ』に轉じて『フレル』といへるなれば霜雪などの地または、艸木などに、零て有るを、いふ語なれば『ふれる霜』『ふれる雪』などは、いふべけれど、ふれる雨、とはいひがたし、いかにとなれば、雨は、今目前に、空より、零來（フリク）る處をば、詠べけれど、地に、降りて有る、をば、詠べからざればなり、然るを、桂園一枝に、山家雨といふ題にて『岩ほより

まづぬれそめて山里の垣根さびしくふれる雨かな、とよめるは、誤なり、是は、作者も、直（タダ）に、ふる雨かな、といはまほしかりけめど、しかいひては、七もじの句に、一ト もじたらぬ故に、ふれる雨哉、とは、置けるなるべし、さて、是は、誤なるに心づける故にや、この歌の、五ノ句を、鴨川集といふ物には、『そゝぐ雨かな』と直して入レたれどさても猶、おだやかならずかし、この歌にして、この病あるは、いと惜（アタラシ）き、わざにこそ、

此歌殊に上に『岩ほよりまづ濡そめて』といへればいよ〳〵以てふれる雨とはいひがたし

詞の玉の緒よりつぎ卷ノ中附錄畢

詞之玉の緒よりつぎ　卷之下

八木立禮著

○ ましより、体言に、つづくる格

伊勢集　見ずきかずあらまし時はしづはたのたてぬきみだる心地せましや

ましを、かやうに用へるは、珍しと思ふにつけて、猶つら〳〵思みるに、誰も、大かた、ましは截斷言と、のみ思ふめれど、連躰言にも用ハ(ツカ)るゝ理あり、そはいかにとなれば、まづ物といふ語は、体言なるに、まし物とも、まし物をとも續けいひ、をは、連躰言より受る辭なるに、ましをと承るにて、ましの連躰言にも、用はるゝ事の、いとよく知るゝようへに

萬葉六　玉しきて待まし欲(ホシ)利者たけそかに來有(キタル)今夜(コヨヒ)し樂しくおもほゆ

とあるにて、いよ〳〵連躰言なること明けし、その故は詞のやちまたの圖に示されたる如く、總て、かな までにを より の五ッの辭は、皆、連躰言より承る例なれば也、故に今譬へば咲む花、といふべきを、一字たらぬときは、咲まし花といひ、降む雪といふべきを、ひともじたらぬときは、ふらまし雪といひても、くるしからぬ也、こは、ついでに、認し置なり、

○ 四段の活語、第四ノ音、けせてへめれに、よもじをそへて、令語(オホスルコトバ)に用へる例

貫之集　千早振神たちませよ君が爲つむ春の野の若菜也けり

散木集　雨ふらば枝にさらせよさくら花おのがみかさの山にあらずや

伊勢集　かくばかり思ふ心のわりなさはしにてもしれよわすれがたみに

小大君集　長かれよ朝寢の髪の千世結ぶ契ときけばみじかゝりけり

猶、この外にも多かり、さて、右のませ さらせは、さ行四段の活語、知れ長かれは、ら行四段の活語なれば、さらせ ませ 知れ 長かれ とのみにて、令語なるを、かく、よもじを添てもよめり、詞のやちまたに、いはゆる、下知の語は、四段の活は、第四ノ音 けせてへめれにて、譬へば咲け 渡

せ勝て、といへば、令語になる也、とのみ云れて、よもじ添ても、いはるるよしを、擧られざれば、今の語學者流かたくなに、四段の活語、第四ノ音、けせてへめれに、よもじを、そへて、咲けよ。わたせよ。とやうにいふは、謬なり、と心得たゞめれば、今、右の歌どもを引て、かのよもじを添ても、いはるゝよしを諭す也、然れども、すべて、四段の活語には、よもじを、そへずしていふが正格、そへていふは、變格なり、と心得置べし、

○ 來は、たゞこ、とのみいひて、令語なる事

古今　みちのくの安達の眞弓わがひかば來さへよりこしのびくに

同　月夜よし夜よしと人に告やらばこてふに似たり待ずしもあらず

新古今　とめこかし梅さかりなるわがやどをうときも人は折にこそよれ

右の歌どもの、よりこは、寄來よ』こてふは來よてふ』こかしは來よかしなり、さて此來といふ語は、如此、ことのみいひて、令語とするが正格にて、右の外、古歌集、古記錄等に、この例數知ず、多し、出雲風土記上卷にも、『國來國來』(クニコクニコ)とあり、こよといふは、かへり

て變格なり、

小町集　よひ〳〵に夢のたましひ足たゞくありかで待んとぶらひにこよ

兼輔集　わすれても猶わすられずうちしのびとくめぐりこよ空の浮雲

右の如く、よもじをそへて、よめる例も、なきにはあらざれども、いとまれなれば、今、歌にも、文にもこの來を、令語に用はんには、たゞこ、とのみいふべし、

○ 來たると、來るとの辨別

萬葉一　春すぎて夏來良之白たへの衣ほしたり天の香具山

同六　玉しきて待ましよりはたけそかに來有こよひし樂しくおもほゆ

賴政集　花さかばつげんといひし山ざとの使は來たり馬に鞍おけ

など、よめるにて、よく思ひ看よ、來良之は『來て在るらし』來有今夜は『戀しき人の、來て在る今夜』使は來たりは『使は來て在り』といふ意にて、前より來て、今も猶在るを、いふ語なり、來るは

古今　鶯の谷より出る聲なくば春來ることを誰かしらまし

同　みるめなきわが身を浦としらねばやかれなで蜑の足たゆく來る

同　かくれぬの下よりおふるねぬなはのねぬ名はたゞじ來るな厭そ

など、よめるにて、よく思ひ見よ、皆物、事の、今目前に來るをいふ意なり、されば、來たるは半過去の語、來るは現在の語なり、と心得べし、然るを漢籍讀には、來ノ字を、うちまかせて、何處も皆、キタリ キタル キタレ、とのみ訓て、くるこなどは、訓ざれば、皇朝の學問をし、歌をよむ輩も、漢文の中にて讀ときは、いづこにても皆、キタリ キタル キタレ とのみ訓て、クル コ、とやうには、よまざるぞ、いと杜撰なる、そは、譬へば論語ノ學而篇に『有レ朋自二遠方一來不二亦樂一乎』とある文中の來ノ字を、道春、徂徠、象山、闇齋、後藤、佐藤の諸點本にも、其外の訓點本にも、皆キタル、とのみ訓じ、今の儒者の、童子に句讀を授るにも、皆キタル、とのみ訓ずれども、清家の古點本には、クルと訓じたり、そは、かの章の文義は、たゞ來る意に

て、來而在、といふ意には、あらざれば也、さて總て、詩などに用へる來の字も、大抵は、今現在に、來る意にて、來而在、來矣などの意はいと〳〵希なり、その證は、杜律龍山詩に『龍門横レ野斷、驛樹出レ城來』また陪二鄭廣文一遊二何將軍山林一詩『銀甲彈レ箏用金魚換レ酒來』また『野老來看レ客、河魚不レ取レ餞』また喜達行在所詩『所親驚二老瘦一辛苦賊中來、また不見詩 匡山讀レ書處、頭白好歸來、また秦州雜詩『牽牛去幾許、宛馬至レ今來』また梅雨詩『湛々長江去、冥々細雨來、また悲秋詩『家遠傳レ書日、秋來爲レ客情、また放船詩『靑惜二峯巒過一黄知二橘柚來一』また夕烽詩『夕烽來不レ近、毎日報二平安一、また送舍弟頴赴二齊州一詩『風塵暗不開、汝去幾時來、また春日江村『隣家送二魚鼈一問レ我數能來、また宿靑草湖『湖雁雙々起、人來故北征、また祠南夕望『與來猶杖屨、日斷更雲沙、また銅官渚守風『飛來雙白鶴、過去杳難レ攀、また江閣對雨云々『雨來銅柱北應レ洗二伏波軍一、また賓至不レ嫌三野外無二供給一乘レ興還來看二藥欄一、また江村『自去自來堂上燕、相親相近水中鷗、また野老『漁人網集二澄潭一下、賈客船隨二返照一來、また和裴迪云々逢早梅見寄『幸不二折來

傷二歳暮一若爲看去亂二郷愁一、また所思『可レ憐懐抱向レ人盡、欲問二平安一、無二使來（クル）一』また王十七侍御云云『江鶴巧當二幽徑一浴、鄰雞還過二短墻一來（ク）、また秋盡『雪嶺獨見西日落、劍門猶阻北人來（クルヲ）、また送辛員外『直至二綿州一始分レ首、江頭樹裏共レ誰來（コン）、また江上云々『老去詩篇渾漫興、春來（キテ）、花鳥莫二深愁一ま

た將歸成都草堂『昔去爲レ憂二亂兵入一、今來（クルニハ）已恐二鄰人非一、また暮登西安寺鐘樓『暮倚二高樓一對二雪峯一、僧來（キテ）不レ語自鳴レ鐘、また諸將『胡來（キテハ）不レ覺潼關隘、龍起猶聞晉水清また同篇『錦江春色逐レ人來巫峽清秋萬壑哀、また九日『無邊落木蕭々下、不盡長江滾々來（ク）、また送李八秘書『青簾白舫益州來（キ）、巫峽秋濤天地廻、などある、

いかなれば、かやうに、杜律の詩のみ、多く引けるぞ、と云ふに、かの書は、詩人の殊に、規模とする、故なれば也、みな現在にくる意にて、來而在（キタリ）來矣（キタル）の意なるは、一ッも見えず、さて、此外に、客至『舍南舍北皆春水、但見羣鷗日々來（キタルヲ）とある詩のみぞ、來をキタルと訓てもよろしかるべき、そは、いかにとなれば、すべて、但見てふ字は、水滸傳『□□等に、但見、止見といふ文注ありて、但見は、目をつけて、靜カニ、其ノアリサマを見る意のときに用ひ、止見は、その事、その物の、ふと目につきたる意のときに用ふの字にて、猶いはゞ、但見は『ジット見ミレバ』といふ俗語

にあたり、止見は『ト見レバ』といふ俗語に當れり、然れば、こゝに引る、『但見群鷗日々來』の詩も、『舍南舍北は皆春水のみにて他に物なくさて、よく、目を留めてみれば、鷗の群りて、日々に來て居るが見もるのみなりと、いふ意なれば、この來の字のみは、きたるとよみてもよろし、といふなり、そは右に解ける、日々に來て居るの來また、唐詩選ノ中なるも『偶來二松樹下一

高レ枕石頭眠の詩の、來のみは、キタリテと訓じても聞ゆれど、自餘はみな、キ キラ ク クル クレ コ『明朝有レ意抱レ琴來の來を今は皆『キタレ』と訓ずれども、『こ』とか、『こよ』とかよむべしと

やうに訓せずしては、その趣意に叶はぬ也、また來吾語レ女などの語の來はコと訓ずべく、これを、例の『キタレ』と訓ずるは、意たがへり、また戰國策齊策四に、顏斶か齊宣王に見し時、斶が不遜なりしを咎て、左右の近臣どもの、斶にいひし語に、上畧『宣王黠然不說、左右皆曰、斶來、斶來、大王據二千乘之地一、而建千石鐘萬石簴云云とある斶來 斶來をも、今の學者は、斶來々々（ショクキタレ）、と訓ずれども、是は、俗語にていはゞ、斶コイ〳〵、といふ意の、文義なれば、斶コ々々、と訓ずべし、さて、いかなれば、かく詩など、をさへ引て、くだ〳〵しきまで論ふぞ、といふに、この來の字は、十灰の韻にて、常に、詩人の多く、用ふ字なるに、皆かの、

來而在（キタル）　來矣（キタレ）の意なるはなく、キ、キテ、クル、コ、等の意なるのみなれば、そのくるときたるとの、差別（ケヂメ）を知しめんとて、かくは委しく論ふ也、○また今の俗文に來年（タタントシ）、來月（タタンツキ）、來日（タタンヒ）を指て、來某年（キタルナレノトシ）、來ナン月、來ル何日などいへど、キタルは、上にいへる如く、來而在（キナアル）にて、前より來（コ）しが、今も猶在るを、いふ語なれば、今よりの行末をさしていふ來年　來月　來日を、しか訓むは、甚じき謬にあらずや、來たるは、すなはち、今日のみなるをや　よく思ふべし、『さてまた、桂園一枝に『語らはん友にもあらぬ燕すら遠く來（キ）たるは嬉しかりけり、といふ歌あり、是は、かの論語の、有朋、自遠方來、不亦樂乎、の語によりてよめるなるべけれど、燕のくるを、きたるといひては、題意にそむけり、そはすべて燕來は玄鳥（ツバメ）の、北狄の國より、中國に、渡りくるよしを、詠むこゝろばへの、題にこそあれ、燕の、中國に來而在、こゝろばへ、または軒端、梁頭などに、來而巣くひ居を、詠べき題意にては、都て、あらざるをや、

○　たてれをれどもの例幷解

古今　戀しきがかたもかたこそありときけたてれをれどもなき心地する

赤人集　見わたせば春日の野べにたつ霞たてれをれども君がこゝろに

是は、立（タテ）れども、居（ヲ）れどもにて、上なる、立（タテ）れの下のどもを一ッ省ける一格なれば、擧る也、この格をあやしみて、『たてれ』は字の誤りにて『たてり』也、などいふ說あれども、論ふに足らず、そは、『たてり』は『起有』にて、立て在るをいひ、『をり』は居有にて、座して居るをいふ也、されば『たてれども』、『居れども』は、雖二起在一雖二居在一といふ義にて俗に立テモ座テモ、などいふ語の如し、然るを、たてりをれども、といひて語を成んや、おもふべし、こは畢竟、起居、立座、などの字義をだに、しらぬ妄說にて、實に論なし因に云ふ、紐鏡、詞のやちまた等の書にも、有居と二ッ並べてあげ、ら行四段の活の變格にせられたれど、居は本來居有にて『キアリ』の約りて『ヲリ』となれりといふ故は、『キアリ』の『井ア』を約れば『ワ』となる、その『ワ』に居の、重りたるなれば、有を『ヲ』に轉じて、『ヲリ』といひ來たるなり　有に居の、重りたるなれば、有と同じ格に活る也、さて、この語は、現在の意のときは、ワ行一段にて、ゐるゐれ、と活き、半過去の意のときは、ら行四段の變格にて、をらんをり　をる　をれと活くと知るべし、猶いはゞ、をりの居有なる證は、右の立

有と對したるにても知るべく、また、をりよりは、有に重りて、をれりと活ける語のなきにても、をりは、居有の約りなるを知べし、

○ 五の句の下に、は も等の辭を加へて、上にかへしみる一格

躬恒集　ねたくわれ子日の松にならましを あなうらやまし 人に引るゝ

重之集　千とせをはひなにてのみや過しけん 小鶴の池といひてひさしき

後拾遺　秋の夜は早長月になりにけり ことわりなれや ねさめせらるゝ

猶多かれど、皆この例にたがはず、是は、玉の緒にいはゆる、變格の如く聞もれど、よくおもへば、かの變格として、擧られたる歌どもは、五の句うへに、かへらずして、下にかな よ等の辭を含みて、其所にて留れり、是は、下には も等の辭を含みて、意うへにかへりて、趣旨通じたれば、別格也、

○ 四の句にてかなといひすつる一格

貫之集　天雲のよそのものとは知ながらめづらしきかな 雁のはつ聲

元輔集　別けん心を汲てなみだ川おもひやるかな こぞのけふをも

順集　らにもがな菊もかれにし秋の野のもえにけるかな さほの山づら

是は、用格に深き意はなけれど、四の句に、かなをおけるは、いとまれにて、これはた一格なれば、あぐる也、

○ とに かと辭を、三ッ連ねたる格

萬葉七　霜ぐもり爲登爾可あらん久かたの夜わたる月のみえぬ思へば

猶是かれみえたり、是も、用格に深き意はなけれど、かく續る一格なれば、今擧て、その例を、人に知しむる也、

○ 俗にデ、といふに當れるにの例

家持集　手にをれば袖さへにほふ女郎花その白露もちらまくをしも

此にと、目に見、耳に聞、などのにて、雅言の正格にては、もてといひ、手に折るは、手もて折る、目に見るは、目もて見 俗語 にはデといふに る、耳にきくは、耳もてきくといふが、ごとし

手に折るは、手デヲル、目に見るは、目デ見 當りて、家に住、身に着る、なル、耳にきくは、耳デキクといふがごとし

どのにとは、異なる一格なるを、玉の緒にの部に、もらされたれば、今擧る也

萬葉二長歌渡會の齋宮も神風爾伊吹まどはし云々とある神風にのにもこの『に』にて俗にデといひにてなどいふに也

○ もての意なるしての例

古今　今更にとふべき人もおもほえず八重葎して門させりてへ

信明集　うちつけにおもひやいづとふる里のしのふ艸してすれる也けり

猶、物語ぶみなどに『人していひおこせける、』などみえ、今の女のかく、俗文にも『ふみして申上、』などつかふしても、右の歌どもの、してと同意にて是も雅言の正格にてもてといひ、そは『やへむぐらしては、やへむぐらもて』ふが如し俗語にはデといふ『やへむぐらしては、しのぶ艸もて、しのぶ艸しては、しのぶ艸デ、といふがごとし、に當りて、『花ぐもりして』『紅葉して』爲而などのしてにもあらず、また、古今『わが身ひとつはもとの身にして萬葉『鰒の貝のかた思ひにして、などのして、とも異なる、一格なるを、玉の緒なるしての條に、もらされたれば、今擧る也、

因にいふ、玉あられに、紅葉して、とはいへど、落葉してとはいはず、と云れたるは、實にさることにて、紅葉はもみぢ、もみづ、もみづる、もみづれタ行中二段と活く語なれば、紅葉して、とはいはるゝを、落葉の葉は躰言なれば

落葉して、とはいはれず、そは、たとへば、時雨して時雨は、しぐれ、しぐれと活く也、とはいはれど、雨して雨は躰言なるゝ、しぐるゝ、しぐるとは云れず、霙して霙は、みぞれ、みぞるゝ、みぞる、と活く也とはいはれど、雪して雪は躰言なれば、みぞれ、みぞる、みぞれ也、然るを、上に引る古今集歌の『八重葎して』を、遠鏡に『ヤヘムグラガシテ』と俗譯せられたるは非なり、その故は、すでに、落葉は、躰言なれば、落葉してとは、云れざるに、心づかれたりながら、この『八重葎』も、躰言なるを、『ヤヘムグラガシテ』八重葎ガシテは、則ち落葉しての『して』に同じければ、こゝは、ヤヘムグラデと俗語に譯すべき所なるをやと譯するときは、かの落葉しての、同例になれば也、こは、いはゆる千慮の一失なりかし、また、かの紅葉してなどのしては爲にせしすするすれ、と活く語にて、總て、用言より承る語なるに、子日、または、露などの如き、躰言より、『子日して』『子日する、』『露して』『露する』『雪ませて見るべき物を神無月しぐれ』『伊勢集に袖の露もこそすれなどもあり』とやうに承ていへるは、いかゞと思ふ人もあるべけれど、子日して子日するなどは『子日の遊びして』『子日の遊びする

などいふべきなれど、一句の中にて、然は、いひとり難き故に、遊ひてふ語を略きて、子日して 子日するとやうにいひ、露はもと、つえ つゆ つゆるつゆれと活く語にて、露けく 露けし 露けき、とも活く語なれば、かの、露して、露するなども、紅葉して、紅葉するの同例なり、と心得べし

○ ほと〳〵といふ語の下に、過去の辭を置る例、並解

萬葉八　わがやどの一村萩をおもふ子にみせず殆令散(ホトホトチラシ)つるかも

同十　春さればすがるなす野の時鳥保等(ホトホト)穗跡妹に逢ず來にけり

同七　みぬさとるみわの祝部(ハフリ)がいはふ杉原たき木こり殆(ホトホト)しくに手斧取れぬ

総て、ほと〳〵てふ語は、漢籍、訓、または、俗語に『ホトンド』といふ語の、本語 殆 幾、などの字の義にて、物事のその眞際(マギハ)までは、至りしかども、終に其ノ所には、至ざりしを、いふ語なればそは、殆を、大學傳十章に、『アヤフキ』義の處に用ひ、幾を漢書ノ楊雄が傳に、幾死、と用ひて楊子雲が、天祿閣より飛下りて將に死ん、とせしを、幸にして、死さりし事に、開せたるにても、其ノ眞際まで、は至しかども其所には、至らざりしをいふことばなるをしべし下には、必ず、未然の辭を、置べきが、定格のやうに思はるゝを、つるか

も、にけり、ぬ等の過去の辭を置る故、人多く、疑ひ思へることなれど、然過去の辭を置る理ある也、そは、上に引る歌どもにていはば『思ふ子に見せずほと〳〵散らしつるかも、』は『思ふ子に見せずして、散らしつるかも、と云て、惜しみ、歎くべかりしかども、萩の殆(ホトホト)ちるべかりしをりに、思ふ子が來しかば、幸にして、末だ散らぬ所を、見せつるかも』といふ意『ほと〳〵妹に逢ず來にけり』は、『殆妹に逢ずして歸んとせしを、幸にして逢ひて、歸來にけり』といふ意、『ほと〳〵しくに手斧とられぬ』は、『殆手斧を、執らるべかりしに、幸にして、とられざりき』といふ意なり、故に、この語の下は、みな、つるかも、にけり、畢ンのぬ等の、過去の辭にて、結べる也、是等は、殊にこれまで、人の考へ得ざりし事なるを、立禮はじめて、見解せる也

○ さかしらなどのらの用格

古今　さかしらに夏は人まね笹の葉のさやぐ霜夜をわが獨ぬる

同　わびしらにましらな啼そあし引の山のかひある今日にやはあらぬ

順集　わかれゆく秋ををしらに鳴鹿は命をさへや留めかぬらん

萬葉四長うた　をかなどに物悲良爾云々

猶、いと多かり、この外にも、安ら、清ら、など常につかふらは雅言には、げ

といふに似て、『さかしらは、さかしげ。』『わびしらは、わびしげ。』『をしらは惜

しげ。』、『かなしらは、悲しげ。』安ら、清らは、安げ、清げ、などいふに、近

く聞え、俗語には、サウといふ語に、よく當りて、『さかしらは、賢シサウ

『わびしらは、難儀シサウ、『をしらは惜シサウ、『かなしらは、悲シサウ、

安ら、清らは、ヤスサウ、キヨサウ、といふ意なりと、心得べし

○ べら（なり／なる／なれ）の用格

古今　なきとむる花しなければうくひすもはては物うく成ぬべらなり

同　難波がたおふる玉藻をかりそめの蜑とぞわれはなりぬべらなる

同　春の着るかすみの衣ぬきをうすみ山風にこそみだるべらなれ

など、その外、此集にも、後撰、拾遺等の集にも、當時（ソノコロ）の人の家ノ集にも、

此、べらなり、べらなる、べらなれ、てふ辭、數しらず多かり、さて此、べ

らのべは可（ベシ）のべ、らは、上に擧たる、『さかしら、『をしら、『安ら清らな

どのらにて、かの雅言には、さかしげ清げなどいふげに近く、俗語には、サ

カシサウ、清サウなどいふ、サウに當れるら也、されば、このべらも、可（ベ）く

ありげ、または可クアリサウ、といふ意なり、と心得べく、さて、なりな

るなれは　連躰言より承るとの、『なり』『なる』『なれ』は俗に、『ナリ』『な俗に、ヂヤ（ナリ）ヂヤ

いふ語に當れるば、べらなり　べらなる　べらなれともに、ベクアリサウ　ヂヤ

と譯して、その意の處に用ふべし、そは、いかにとなれば、可（ベシ）も、清し、安

し、など同じく、雜音にて、くしきけれさみら、と活く辭なれ

ば、『べく』『べし』『べき』『べける』『べさ』『べみ』『べら』と活くうちに

『べさ』てふ辭は、物にみえざれども、必、しかいはるゝ理なり、

このべらのらも、清ら安らのらと同じく、雅言には、げといふに近く、

俗語には、サウ、といふに當れり、とは云ふ也、故に、清ら、安らを、清げ、安

げ、清サウ、安サウと見るが

ごとく『べら』をも、べくあるげ『べクアリサウ』と見よ、とはいふなり

○ べみの用格

古今　さほ山のはゝその紅葉ちりぬべみよるさへ見よとてらす月かげ

同　玉くしげあけば君が名たちぬべみ夜ふかく來しを人見けんかも

萬葉七　なげきせば人可知見山川のたぎつ心をせかへたるかも

同十　秋芽子をちり過沼蛇手折持みれどもさびし君にしあらずば

同十三長うた　起たゝば父しりぬべみ出たゝば母しりぬべみ

猶、この外にも、數しらず多し、是も、上にいへるごとく、可のべくべしべきべけれべみ、と活けるにて、かの『山高み』『月清み』『瀬を早み』などの、みに同じく、『彼が然ある故に、是が如此あり、』『是が如此ある故に、彼が然あり』とやうに、此ノ事、此ノ物につけて、彼ノ事、彼ノ物のうへに及ぼし、彼ノ事、彼ノ物のうへにつきて、此ノ事、此ノ物のへうに及ぶ』意の辭なり、そは譬へば『瀬を早み岩にせかるゝ瀧川の』云々の、大御歌にて申さば、『瀬の早き故に、岩に塞かるゝ瀧川の』と申す大御意なるが如く、上に引る、古今集の歌の『はゝその紅葉ちりぬべみ夜さへ見よと』も『柞の紅葉の、ちりぬべき故に、夜さへ見よとて、月のてらす』といふ意なり、さてまた、このべみのみは玉あられに、この『み』を『さに』といふ意なりとて、『月清み』『山高み』は『月が清さに』『山が高さに』と見るべしと、いはれたるは粗し、俗語には、ニョッテと譯して、べみをばベキニョッテと見るべし、そはかの、山高みは、山ガ高イニョッテ、月清みは、月ガ清イニョッテと見るが如し

○ また、べみこそとも用へり

萬葉十四　山鳥の尾ろのはつ尾にかゝみかけとなふ倍美古曾名によそりけめ

是もべき故にこそ、ベキニョッテコソ、と看れば、よく通ずる也

○ の如くに、といふ意のにの例

古今六　いくよしもあらしわが身をなぞもかく蜑のかる藻におもひ亂るゝ

同十九　吾をのみ思ふといはばあるべきをいでやこゝろは大麻にして

萬葉七　はつせ川白木綿花爾おちたぎつ瀬をさやけみと見に來し吾を

同八　山たかみ白木綿花爾おちたぎつ夏見の川戸みれどあかぬかも

同十三　あふ坂をうち出てみれば淡海のうみ白木綿花爾波たちわたる

延喜式卷八祝詞　天津菅曾乎本刈斷末刈切豆八針爾取拆豆

などのには、皆の如くに、といふ意にて、上に引る歌の『蜑のかる藻に思みだるゝ』といふ意、『大麻にして、は、大麻の如くにして、引手あまたなり、といふ意にて、その本來は、似るてふ語より出たる辭なり、されば、この『蜑のかる藻に思ひみだるゝ』をば『蜑のかる藻に似て、みだるゝ、と見『大麻にしては『大麻に似て引手あまたなり、とやうに見ても、その意よく通ずる也、さて總て、なにぬねの五音は、何にまれ、物事の相似ること、または、の如くなどいふ時に、つかふ辭にて、譬へば、まづ古事記上『久羅下那須、多陀余傚流、『沫雪那須疑散、萬葉『水鴨奈須、二人並居』などのなすこの『なす』も、『の如く』の意にて、『クラゲナスタダヨヘル、は『海月の如くたゞよへる、ミガモナス、

漢籍ノ舊訓ニ似ノ字ヲノレリトアル則コノノルヨリ有ニカサナレルナリ

フタリナラビヰは『水鴨の如く』並居といふ意なり　その次には、上に引るの如くにといふ意のに、また、似る　贋る、その次には、傚る、その次には、傚、その次には、の如く　の意なるの、よしの川岩波たかく行水の早くぞ人を思ひ初てし『夕月夜さすやを かべの松の葉のいつともわかぬ戀もするかな、などの三句の末なるのまた、似る意ののるこれは、ら行にて、『のらん』『のり』『のる』『のれ』なる也　ど四段に活きて、何物何事も、相似る意の語なりなどの如し

○　の如くの意のとの例

古今　戀すればわが身は影となりにけりさりとて人にそはぬものゆゑ

同　白雲のあなたかなたに立わかれ心をぬさとくたく旅かな

同　あはぬ夜のふるしら雪とつもりなば吾さへともにけぬべき物を

同　くもり日の影としなれる吾なれば目にこそみえね身をばはなれず

萬葉七　よしの川石迹柏等ときはなし吾はかよはん萬世までに

などある歌の『影となる身は、影の如くなる身影の如くなるとは、身のやせをいへ、朝影、夕影の如く細ること るなり『白雪とつもりなばは、白雪の如く積りなば、といふ意也、此例、後

自評云
眞前人所未發

撰以下の撰集にも、萬葉集にも、いと多かり

○ 序歌に五躰ある事

まづ一ッには、比諭をとりて、仲際に、の如くといふ意のを置て、いひ續る格

古今十一　よしの河岩波たかくゐく水の『早くぞ人をおもひそめてし
同　わがそのゝうめの上枝に鶯の『音になきぬべき戀もするかな
同　秋の野の尾花にまじり咲花の『色にやこひんあふよしをなみ
拾遺　あし引の山鳥の尾のしだり尾の『ながゝし夜を獨かもねん

とやうに、大かたは三ノ句に、のもじを置たるが多し、されど、二ノ句に置るも、四の句に置るも、またなきに非ず、二の句に置るは、

古今　紅のはつ花ぞめの『色ふかくおもひしこゝろわれわすれめや
後拾遺　風をいたみ岩うつ波の『おのれのみくだけて物を思ふ頃かな
萬葉　ひたがたの磯のわか布廼『たちみだえわをか待なもきぞもこよひも

四の句に置るは

新勅撰　來ぬ人を松帆の浦の夕なぎに焼くや藻鹽の『身もこがれつゝ

二ッには、比喩を取て、自餘の辭にて、續る格

古今　かた糸をかなたこなたによりかけて『逢ずば何を玉の緒にせん
同　梓弓ひけば本末わが方に『よるこそまされ戀のこゝろは（夜）
同　おきへにもよらぬ玉藻の波の上に『亂れてのみや戀わたりなん
同　洙雪の積れば撓てに『くだけつゝわが物おもひのしげき頃かな
同　伊勢の蜑の朝な夕なにかづくてふ『みるめに人をあくよしもがな
同　山ざくらかすみのまより『ほのかにもみてし人こそこひしかりけれ

三ッには、辭を置ずして、比喩の意のみにて躰言より續る格

古今　五月山木末を高みほとゝぎす（躰言）『啼音空なる戀もするかな
同　千早振かものやしろのゆふだすき（同）『ひと日も君をかけぬ日はなし
同　手もふれで月日經にけるしらま弓『おきふしよるはいこそねられぬ

後拾遺　湊いづる蜑の小ふねのいかり縄『くるしき物と戀をしりぬる　詠言
散木集　いかだしにあふ柚川のみをづくし『おしのけられて世にもふるかな　同
古今　春がすみたなびく山のさくら花『みれどもあかぬ君にもあるかな　同
是等は皆三ノ句より、意をつぶけたり、また、二ノ句より續けたるは、
古今　山しろのよどのわかごも『かりにだにこぬ人たのむ吾ぞはかなき　詠言
同　伊勢の海のあまの釣縄『うちはへてくるしとのみや戀わたりなん　同
同　まこもかる淀の澤水『雨ふれば常よりことにまさるわが戀　同
同　おとにのみ菊の白露『よるはおきてひるは思ひにあへずけぬべし　同
同　いは間もく水の白波『たちかへりかくこそはみめあかずもある哉　同
四ッには、比喩にはあらず、只詞のいひくさりにて、續る格
古今　ほとゝぎすなくやさつきの菖蒲草『あやめもしらぬ戀もするかな　詠言
同　おもひ出るときはの山の岩つつじいはねばこそあれ戀しき物を　同
同　みちのくのあさかの沼の花かつみ『かつみる人にこひやわたらん　同

同　あふさかの關になかるゝ岩清水『いはで心におもひこそすれ　同
同　敷しまのやまとにはあらぬ唐衣『ころもへずしてあふよしもがな　同
萬葉　あどの山いほへかくせるさでの崎『さではへし子が夢にしみもる　同
同　春されば春がるなす野の時鳥『ほと〳〵妹にあはず來にけり　同
同　筑波ねにそがひにみもるあしほ山『あしかるとがもさねみえなくに
是等は、皆三ノ句より、くされり、また、二ノ句より、くされるは
古今　住の江のきしによる波『よるさへや夢のかよひぢ人めよくらん　同
同　東路のさやの中山『なか〳〵に何しか人をあひみそめけん　同
同　石上ふるの中みち『なか〳〵にみずば戀しとおもはましやは　同
萬葉　いそのかみふるの高橋『たか〳〵に妹が待らん夜ぞふけにける　同
五ッには、詞のくさりにて、つづけながら、の、もじを置る格、此『の』は『の如』
『く』の意にはあらず
まづは、助辭なり
古今　あしがものさわぐ入江のしら波の『しらずや人をかくこひんとは　同

同　かくれ沼の下より生るねぬなはの『ねぬ名はたゝじくるないとひそ
同　みよしの〻大川のべの藤なみの『なみにおもはゞわれこひめやは
同　最上川のぼればゝくだる稲舟の『いなにはあらずこの月ばかり
顯季朝臣集　いかにせん野澤におふる丸菅の『まろすげもなき戀にしぬべし
是等は、皆、三ノ句にのもじを置て、くされり、また、二ノ句に置るは
古今　山科のおとはの山の『おとにだに人のしるべくわれこひめやも
同　あふ事をながらの橋の『ながらへて戀わたるまに年ぞへにける
萬葉　川上のいつ藻の花の『いつも〳〵來ませわがせ子時じけめやも
序歌の詠格は、大率、右の如し

○其事を、直には、いはず、かたへの事をあげて、その事に、聞する一ッの詠格

古今　白波のあとなきかたに行舟も風ぞたよりのしるべなりける
　　○サレバ、ワガ戀モ、便リノ案内スル者ナクテ、人ニ逢ルベシヤハ

同　あふ坂のゆふつけどりにあらばこそ君がゆき〻をなく〳〵もみめ
　　○吾ハ、木綿ッケ鳥ニ、アラザレバ、君ガ往來ヲ、見テ、ノミハ在レズ、
同　うちわびてよばはんこゑに山彦のこたへぬ山はあらじとぞおもふ
　　○然ルニ、ワガカバカリ、戀ワビテ言カクル書ノ、答ヘセヌハイカニゾヤ、
同　夏虫の身をいたづらになすこともひとつおもひによりてなりけり
　　○然レバ、吾モ、コノ人ヲ思フ、オモヒノタメニ、身ヲイタヅラニ、ナシハテヤセン、
同　底ひなき淵やはさわぐ山川のあさき瀬にこそあだ波はたて
　　○ワガ、人ヲ戀ル心ハ、淵ノ如ク深ケレバ、口ニ、出シテ、戀シ、トハ、云ハズ、
清正集　はしたかのすずろありきにあらばこそかりとも人におもひなされめ
　　○吾ハ、スズロアリキニ、アラザレバ、カリソメニ、來、ト思ヒナスヿナカレ、
顯輔集　あさましや千島のえぞに作るてふとぐきのやこそひまはもるなれ
　　○カバカリニ、忍ブルワガ戀ノ、世ニ洩ルベキ、イハレアランヤ、

とやうに、本事（ソノコト）をば、いはず、傍に、一ッの比喩をかまへて、その事に聞ゆる

このなんを玉の緒に願ふ意の『なん』としてあげられたるは非也』

万葉ニハ此こそニハ乞。社。等ノ字ヲ用ヘリ、是ソノ願フ意ナルヲ知ベシ、サテ社。ハ人ノ願ヲカクル所ナル故ニ希フ意ノ『こそ』ニ社ノ字ヲ假用ヒタルガ、後ニハ、カカリ辭ノ『おそ』ニモ社ノ字ヲカクニナレリ、サレド常ノカカリ辭ノ『こそ』ニ社トカクハ宜シカラズ、

やうに、よみなす一格にて、いと巧なる、詠格なり、

○ 希辭（チガヒコトバ） 托辭（アツラヘコトバ） 令辭（オホセコトバ） の辨

詞の玉の緒には、『たとへば、願ふ意のなん、おほする意のよ、とやうに二種に分られたるを、富士谷氏の、あもひ抄には、あつらへことばといふを加へて、三種に、せられたるは、いと委し、そは希辭（チガヒコトバ）といふは、ばや見ばや、きかばや、などの『ばや』もがなもがな、などの『もがな』なりてしがな咲せてしがな、みてしがな、などの『てしがな』也などの如く、わが心にのみ、願ひ居て、他に對して、しか〳〵してよ、などは、いはぬをいふ、托辭（アツラヘコトバ）とは、なん『早もさかなん』『みもきまてよ』『かぢかたなん』などの『なん』也『書つくしてよ』くしてよなどの『てよ』也こそきくありこそ』『妹につげこそ』などある『こそ』なり

『是は、かゝり辭の『こそ』とは別にて、萬葉集中に、『まさあせ伊勢物語に、出たる歌の『鴈につげあせ』などの『こせ』也 などの如く、他に對して、しか〳〵してよ俗語に『タノム』といふ意なり『あつらへ附る辭をいふ、令辭（オホセコトバ）とは、咲け 渡せ 見よ 起よ告よ 爲よ（來）こ などの如く、他に對して、しか〳〵爲よ 俗語に『イヒツケル』といふがごとし

と直に、命ずるをいふ、さてかく、分ち見る時は、古歌の意も、明らかに、解せられ、自已つかふにも、誤ることなき也、因に云、詞のやちまたの跋文に『この、やちまたの、すぢ〳〵に、なぞらへて、辨へてよかし、と大平翁の、かゝれたるも、かの令辭にていふべき處に、托辭を置て、謬られたるにて、たゞ、わきまへよかし、といひてよろしき處なるをや

○ 古風の歌にも、詞を、いひかくる例ある辨

萬葉一 旅にして物悲鳴（モノカナシキ）のなく聲も聞えざりせばこひてしなまし

同四 うき名のみ龍の市とはさわげども いざまた人をうるよしのなき

右の外にも、これかれみえたり、はじめなるは、物の悲しきを、鳥の鳴にいひかけたり、次なるは、うき名の立つを、龍の市に、いひかけ、また、市の緣なれば、さわぐといひ、また、人を得るを、市にて、物を賣るに、いひかけたり、然るを、今の世に、古學して、古風の歌よむ輩、かたくなに、古風に、よみなさん歌には、詞のいひかけは、せられぬ事、とのみ心得たれば、おど

ろかし置く也、猶いはゞ、萬葉集中なる、『わかごもを、獵路(カリヂ)の小野』『遠津人松浦待(ケタリ)』などやうの、冠辭も、みな、詞のいひかけ、なるをや、

○ 俗語めきたれば、用はるまじく思はるゝ語の、却て、上古にも、中昔にも、歌によめる語ども、

○ もしの例

萬葉十一　馬の音(ト)のとゝともすれば松かげに出てぞ見つるもしも君かと

元輔集　かへる雁きみもしあはゞふるさとに櫻をしむと鳴てつげなん

同　吹かせのたよりにもしや聞てけんけふと契し山のもみぢも

同　露の命もしとゞまらば秋ふともことしばかりぞ春の望みは

信明集　いそぎけん心のうちをしらぬ哉もし百敢にとこやさだむる

是は、文には、多くつかへれど、歌には、まれなれば、こゝに擧て、歌にもつかはる語なるよしを示す也、

○ 甚(ハナハダ)の例

萬葉十　甚多毛ふらぬ雪ゆゑこちたくも天のみそらはくもりあひつゝ

同　甚も夜ふけて勿行(ナユキ)道のべのもざゝがうへに霜のふる夜を

同七　甚多毛ふらぬ雨もゆゑにはたづみいたくなゆきそ人のしるべく

同九長歌　天地の神も甚わが念(オモ)ふ心しらずや

是等は、今つかふ、ハナハダに、異なることなし、

○ すなはちの例

同八　雲公鳥鳴之登時(スナハチ)君が屋にゆけと追ひしは至りけんかも

貫之集　春たち(シ)ぬすなはちごとに君がため千年へぬべき若菜なりけり

是は、俗語には、直接(スグサマ)といふ意にて、漢文に用ふ、卽。則。登。時等の義に、たがふことなし、

○ かつての例

萬葉十　木だかくは曾木(カツテ)うゑじ時鳥來なきとよめてこひまさらしむ

是は、漢文に、未曾、などつかふカツテの義にて、俗に決シテといふ語に同じ

同　　我せこがさゝげてもたるほゝがし葉あたかも似るか青ききぬがさ　　○　あたかもの例

この語漢文には恰宛の字を用ひて今の俗語にチャウドといふがごとし

同七　琴とればなげきさきだつ蓋毛琴の下樋に妻やこもれる　　○　けだしの例

同四　蓋毛人の中言きけるかもこゝだくまでど君がきまさぬ

同九　山科の石田の社にぬさおかば蓋わぎもにたぶに逢んかも

同十　奈何牡鹿のわび鳴すなる蓋毛秋野の芽子やしげくちるらん

猶、此外にも『けだしや鳴し』『けだし逢んかも』などいと多し、さて、此語は、漢文に、用ふ如く、半信半疑の義にて、その本來は、けは、異にて、物事の殊異なる意、日本記に、異行を『ケシたしは、確にて、物事の、確實なる意なれば、異にて疑ひ、確にて、信ずる意になる也、さてまた、是を、俗語には、『私ハ、タシカ、カウ存ジマシタ、』『ソレハ、タシカ、ココニアッタ』

などいふ、タシカてふ語に充べし、かの俗にいふ、タシカは、かの半信、半疑、なる所に、つかふ語なればなり

赤人集　今更に君はよも來じ春雨のこゝろを人のしらざらなくに　　○　よもの例

散木集　呉竹のつゝをのみ見るけはしさによもこのふしはあらじとぞおもふ

同　よもまはじけふは人みるむかしよりつるはく君が物としらずや

是は、今俗に、ヨモヤといふ語に、同じけれど、雅言なれば、ついでにこゝに、あげおく也

○　ひとつのすらて、中昔の歌には、なし　　是は萬葉集にのみみえ

萬葉九　あぶりほす人もあらめやも家人の春雨須良を間使にして

このすら、右の外數しらず多し、是は常のすら、とは別にて、常の『すら』とは此集に『こゝはぬ木すらあぢさゐ、などみえ後世の歌にも『鳥すらもおもふ心のあればこそ』などの如き『すら』也何の意もなき所に、つかへれば、春雨須良乎は、たゞ春雨乎』と見て、よろしき也、

○　ことならばのことの用格

このことは、殊にの、ことと同意にて、その物事の、わが思へりしとは、殊の外なるを、いふ語なり、さて、これを、今の人は、大かた、ことならばと續け用ふに、限れり、とのみ心得たゝめれどいづれの語にても、未然の辭あるうへには、皆、おきて宜しき也、そは

古今十三　かきくらしことはふらなん春雨にぬれぎぬきせて君を留ん　未然ノ希辭

萬葉十　殊落者袖さへぬれてとほるべくふりなん雪の空にけにつゝ　未然

伊勢集　こき限りことはつみいれて撫子にうつれる袖の色をみせまし　未

此外、猶多かり、右の歌どもは、下にならば、てふ語なけれども、うへにことと置るをや、日本記ノ允恭天皇ノ紀ノ大御歌に、『花ぐはし、櫻のめで、ことめでば、早くはめです、わがめづる子ら』とあることめでばの、ことも、右に引未然る歌どもの、ことと同意也、因に云、此大御歌は、ことめでばの下に、『早くより、めでまし物を』てふ二句を加へて、『早くはめです、』てふ御句へ、續け

みれば、その、大御意、いと明かなり

○　けるとぞ　よめるとなん、などの解

古今十四　歌のおく書に『この歌は、ある人、あめのみかど、あふみの采女に、給ひけるとなん申す、』また十八の歌　『此歌は云々難波の三津の寺にまかり尼のおく書に　けるとなんいへる』また伊勢物語第五段に『二條の后に、しのびて參りけるを世のきこえ、ありければ、せうとたちの、守らせ給ひけるとぞ、また、古今集九歌のおく書に『めいしう、といふ所の、うみべにて、かの國の人、うまの餞しけり、よるになりて、月の、いと面白く、さし出たりけるを見て、よめるとなんかたりつたふる』また十七の歌のおく書に『この三ッの歌は、昔ありける、三たりの翁のよめるとなん、などある、けるとなん、よめるとなん、などは、一わたりおもへば、けるよめるは、連辭言、とは、截斷言より承る辭なれば、けるとよめるとなどいひては、語の格に、たがへれば、恐らくは、けりとよめりと『けり』『よめり』はなどの、りを、るに書誤れる、にもやあらん、と思はる截斷言、なれば也

れば、かの、けるとなん　けるとぞ　よめるとなん、などある所を、けりとなん
けりとぞ　よめりとなんとやうに、置かへて觀るに、却て、聞え、よろしからず、
語をなせりともおもはれねば、猶おもひみるに、右の『此歌は、あめのみかど、
あふみのうねべに、給ひける。となん』は『給ひける御歌なり。となん』といふ意、
『尼になり、よみて、男に、つかはせりける。となん』は、『よみて、男に、つかはせ
りける。歌なり。となん』といふ意、『せうとたちの、守らせ給ひける。とぞ』は
守らせ給ひける。なり。とぞといふ意、『よめる。となん』はよめる。歌なり。となん』
といふ意にて、その、歌なり、なり、などいふ語を略きて、直ちに、ける
よめる等より、と承て、ける。となん　ける。とぞ　よめる。となん、と
やうにいへるにて、譬へば、かの集などの、歌のはし書にも、上にぞなんかか
り辭の『なん』なり等の、かゝり、なきときは『しかくして、よめり』といふが、定格
なるに、却て、しかいへる例は、一ッもなく、皆『しかくしてよめる』との
み、いひすゑたるは、そのよめる、てふ語の下に、歌てふ語を含めて、いひ

とぢめたるにて、實は、よめる歌、といふ意なり、と詞の玉の緒卷七に、さとさ
れたる一格と、同例なれば也、因に云
古今六　天彦のおとづれしとぞ今はおもふ吾か人かと身をたどる世に
伊勢集　二ッあらは今一度は訪てましすべて心のなきとこそみれ
などある、『おとづれしの、しも『心のなきのきも、連躰言なれば、下に、と
とは、承らるまじき例なるに、かくうけたるは、そのしきの下に、ならん
てふ語を含みて、『天彦のおとづれしならんとぞおもふ』『すべて心の、
なきならんとこそみれ、』といふ意にて、上に擧たる、歌なり　なり等を略ける
格と、同例也、また、天彦の心のなどの、のは、仲間に置ては、下の結辭
にて、斷ざれば、しきともに、猶つづく辭にて、下に、ならん、てふ辭を
含める也、

猶、いはまほしき事ども、是かれとあれども、歌の詠格は、まづ、是に
て、つきたれば、筆を閣(サシオキ)つ、猶、詞の玉の緒の、說のたがへる事、また

は、用格の趣意を、解れざる、などは、玉の緒よりつぎ拾遺、に、くはしく辨ずべし、そを、此緣接の中に擧ざる故は、かの、玉の緒の、說の誤、または、解の、とき及ばれざる、などは、かゝり辭にも、結辭にも、また、てに〻〻をなどやうの辭にも、ありて、いと〳〵、溷渚(イリミタレ)たれば、そを今、此中にて、辨せん、とせば、同じく事の、混亂るべきをもて、別に、拾遺に、あぐる也かし、

詞の玉の緒よりつぎ卷之下尾

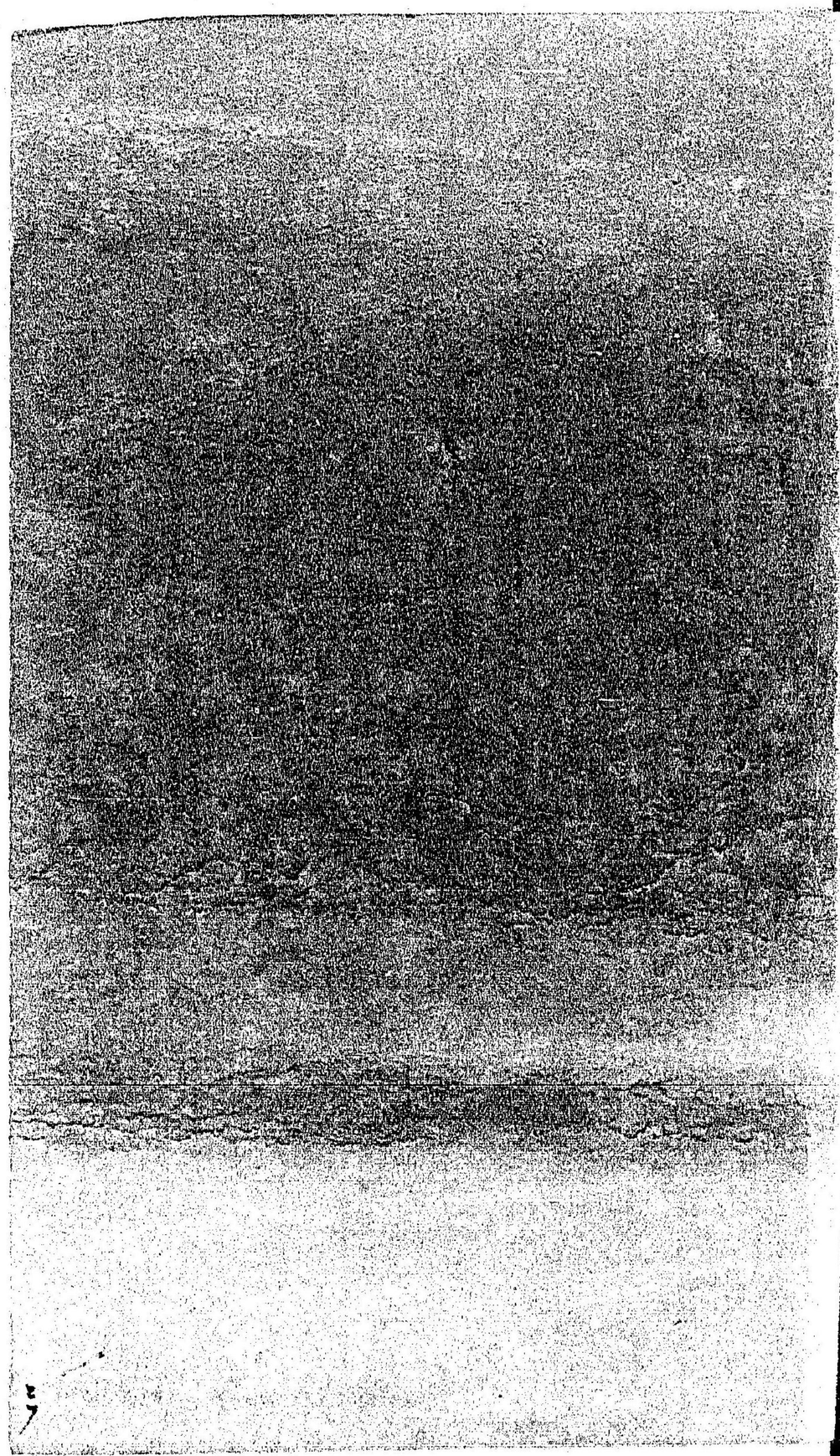
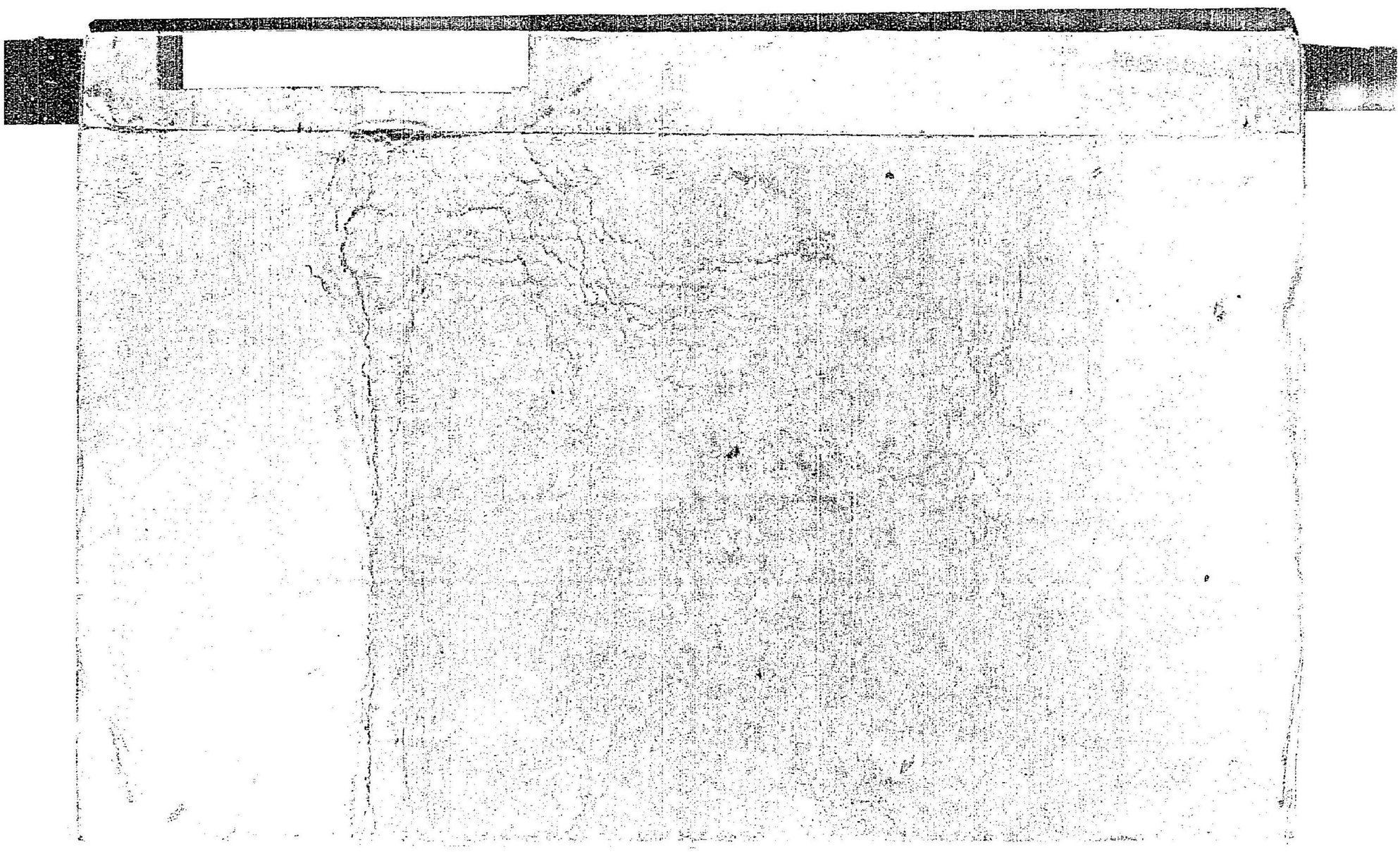
明治三十六年十一月十七日保田元隆の藏書をかりてひとにあとらへてうつさせつ

磯野秋渚

明治四十二年十月八日印刷
明治四十二年十月十二日發行

歌文珍書保存會頒布書第壹

非賣品

備前國和氣郡伊里村大字穗浪三千百七番地
編輯發行人　正宗敦夫
備前國和氣郡伊里村大字穗浪三千百七番地
印刷人　正宗貞
備前國和氣郡伊里村大字穗浪三千百七番地
印刷所　歌文珍書保存會印刷部

發行所　歌文珍書保存會